
驟雨（改訂版）

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

驟雨（改訂版）

【Nコード】

N0944R

【作者名】

デン助

【あらすじ】

術式とは現代の魔法である。それを身につけ、超法規的行動を許された外事四課に所属する秋田章は、落ちこぼれでお世辞にも優秀とは言えない少年。そんな彼にも任務が下され、地元の高校で擬似能力者の拡散を防ぐ為、調査を進める事となる。流されるままに生きてきた彼は自分の意志を見つける事が出来るのか。

第一章 シャンバラの子供達（前書き）

これは以前に投稿した同ジャンル小説『驟雨』を改稿したものです。こちらの連載を終了次第、以前に投稿したものを削除し、同タイトルとさせていただきます。

第一章 シャンバラの子供達

夜の街に銃声が轟いた。外出禁止令が出ている街は人通りもなく静かだったが、それを皮切りに人の声が生まれ、連続する銃声と交じり合い、時に悲鳴さえあがった。

ここは本当に日本か、と秋田章は戸惑った。その少年は平凡な外見だったが、両手で握る自動拳銃がこの尋常ではない場面の関係者である事を示している。

十七歳という年齢でありながら銃を握る職についていて、しかしまだ人を撃った事がない秋田章は、眼鏡の奥に怯えを隠しきれずにいた。

壁に背をつけて、通路を覗き込む。四メートル幅の路地裏を、向こう側から走ってくる人影があつた。軍隊仕様の都市迷彩ジャケツトとカーゴパンツを着た男性は、突撃銃という両手持ちの軍用小銃を、銃口が自分の左下を向くように持っている。

夜といっても視界を潰す程暗いワケではない。章は遭遇する気配に身を固めた。まだ新人——これが初陣となる彼に、怯えるなどというのは酷な話だろう。

距離が詰まる。相手はこちらに気付いていない。緊張で息が荒くなる。気付かれているかもしれないという不安。拳銃を握る手が震えた。建物の中から聞こえる銃声は彼の仲間か、それとも相手の仲間か解らない。心臓の鼓動が早い。口から飛び出しそうだ。手に汗をかいているのが解る。

それでも不安を押し殺し、恐怖を唾ごと飲み込んで、建物の影から飛び出した。

相手の驚いた顔が見える。刈り上げヘアに彫りの深い顔が視界に入った。すぐさま突撃銃を自分に向けてくるのを確認すると、章は左手で自動拳銃を持ち、相手の銃へとぶつけた。下からすくいあげるように、右下から左上へ払った形だ。

銃口を跳ね上げられた相手は驚いている。その大きな体の首元に右下腕を押し当て、相手の足に自分の右足を絡ませながら、腰を落として体重をかける。

大柄な男性は両手で突撃銃を握っているのが禍いして、足を取られているのも相俟って受け身も取れず、倒れた。

柔道に近い動きだが、細部が異なる。CQCという技術だ。

クローズ・クォーターズ・コンバット。近接格闘術として軍隊に広く流布されている優れた格闘メソッドである。弱冠十七歳の章がこれを修めているのには、彼が所属する部署の性質があつての事だった。

「動くな！」

自動拳銃を構えて、相手に向ける。銃口には丸い筒状のもの——銃声を小さく抑える為の減音器がついている。章の声には少しの震えがあつたのを見抜いた男は、僅かに口元を吊り上げ——撃てないと確信した——突撃銃を向けてきた。

そのまま、やはり撃てずにいる章に向けて発砲する。咄嗟に横へ転がり——数発が体に命中する——さっきまでいた建物の壁へ、飛び込むように姿を隠した。

章の着ている黒いトレンチコートは防弾性を持っていた為、出血という被害はなかったが、その代わり鉛弾が鈍器となる。小さいハンマーで思い切り殴られた痛みがあつた。

「う……く、」

起き上がれず、体を丸めて痛みに耐える。どうにか姿を隠したままでは良かったが、状況は不利だった。

周囲の銃声と悲鳴は止まない。号令のようなものも聞こえる。この建物は先月、展開していた企業が撤退した為に空きビルとなつてそのまま置かれている物件だ。コンクリート構造で上は十階まであり、地下は三階。ここに、中国系犯罪シンジケート『虎頭』が関与しているテログループが潜んでいたのだ。

日本でのテロ行為など、若年層である彼には、今まで別世界の出

来事だった。現実感が感じられないのも仕方がないと言えるだろう。（シャンバラの子供達……例の薬物を広めているのは、この人達なのか）

今日の威力偵察染みた強行捜査も、彼らが関係しているという証拠を確保する為のものだ。こうした事前行動において証拠を事後に求める性質は本来、日本の警察機構にない。

しかし攻性の組織として、そういったものが必要とされる事例も多くあるのが実情だ。社会の暗部に切り込むような、鋭い剣が求められて――超法規的行動が認められた組織が結成された。それが、章の所属する部署である。

背にするコンクリート壁が、弾丸の命中を連続で伝えてくる。相手が牽制の為に連射しているのだと察した。建物の上の方から硝子の割れる音が聞こえてくると、それは自分から離れた位置に降り注ぐ。

いや、降ってきたのは硝子の欠片だけではない。次に、人影らしきものが着地したのだ。

敵か、と一気に緊張し、そちらに銃を向ける。しかし、その人影が雲の縫い目から差し込む月光に照らされると、章は銃を下ろした。女性だ。

金髪金眼で、赤いジャケットが嫌でも眼を惹く。ブラックのロングスカートからはストッキングらしきものに包まれた足が覗く。軽やかにスカートの前後を押さえて降り立った姿からは（今でこそ解ったのだが）重力を軽減するような、何か不思議な力が働いているのではないかと疑ってしまう。

事実、彼女はそうした特殊な力を使える人間であった。

その見た目から、レッドジャケット、若しくはキリサキと呼ばれる部署のエース。章は彼女を見て、先輩、と声をかけた。

「あら、新人君。てつきり怯えて帰っちゃったかと思ったわ」

癖がないミディアムカットの金髪を後ろに払って、歩み寄るとその全容がよく見えた。

スレンダー体型で肌は白く、特にウエストの細さに男女問わず眼を奪われる事だろう。気の強そうな澄まし顔は造形が整っており、日本人寄りの美しさを持っている。クォーターだという生まれがその根拠だと章は知っていた。

体を起こして、壁に背をつけると向こうを伺った。相手からの銃声が一旦止んだ為、弾倉交換か様子を見たのだが、フェイントだったらしく再度弾丸が雨霰と浴びせられる。

（敵の装備は突撃銃か。手榴弾がきたらまずいな、こっちは拳銃一挺だし……一度退いて態勢を整えるのがいいか）

顔をひっこめた章を無視して、女性——キリサキは無造作に、右手に彼と同じ自動拳銃を握ったまま、かつかつと硬い靴音をたててまるで普通に、何の警戒もなく進み出た。

当然のように銃弾の群れが襲ってくるが、彼女はそれに臆する事もなく、相手の男性に眼をやった。相手が子供だという油断と慢心からか、何かに姿を隠す事もしていない。

銃弾は、しかし彼女に届く事はない。体の目前で紋章のようなものが浮かぶ。透明な壁に阻まれたかの如く、鉛弾は潰れていく。音をたてて落下した。

その光景に相手は後ずさる。銃声を聞きつけたのか、建物の影から同じ格好をした二人が現れ、隊列を組みつつ合流した。

「こいつ、魔法使いか!？」

そんな言葉が耳に届いた。その認識は間違っていない。

彼女の壁は、それでも破れない。右手の銃を構えて、撃つのは六発。引き金を引くと同時に体を撃ち抜かれ、脳漿と血液と悲鳴を撒き散らしてグループは全滅する。正確に頭と心臓を一発ずつ撃ち抜いている。彼らに見切りをつけると、章に向き直った。

「コンバット・シューティングの基本は、まず心臓を狙う事。頭は外れやすいからね。心臓なら、外しても他の部位に当たる可能性がある。そして心臓に二発、頭に二発。これをダブル・タップというわ。まあ、どうせ君の事だから、撃てないでしょうけれど。はい、

死亡確認して」

頭を垂れつつキリサキへ謝罪し、男に銃を構えたまま近付く。すると、更に建物の影から、一人が様子を伺っていたらしく――キリサキへと銃口を向けるのが、視界の端に見えた。

「――！」

声を出して危険を知らせる暇はなかった。章は咄嗟に、その敵を撃つ事も出来なかった。必然的に、彼は自分の体を盾にする事で、キリサキを守る事に成功した。

右の上腕に痛みが走る。特注のシールド・コートだ、至近距離じゃなければ貫通はまずない、という同僚の言葉を思い出すが、それも今更である。

筋肉の薄い外側に命中し、口から悲鳴が漏れるのを防げない。生理的反応として苦鳴をあげてしまう。倒れる際に頭を打った。

それと同じタイミングで、キリサキの射撃により男の頭部は破壊された。

「うっ……先輩、大丈夫ですか？」

硬い靴音を立てて。彼女は冷たい視線を章に送る。

「一丁前に上司の心配するなんて、余裕あるじゃない」

呆気に取りれた章は右腕を摩りながら、立ち上がって反論する。

「いえ、他意はありませんよ、気に障ったならすみません」

身長は同じ程度だったので、視線の高さに違いはない。

「今のは私も油断してた。君がこのあたりの敵を全部倒して、さっきの三人で最後なのだろうと思っていただけね。そうじゃなかったのね」

遠まわしに責められている。しかも章は一人として、一発として撃っていない。苦い表情になってしまったのは無理もない。

「す、すみません」

「別にいいけど。その調子じゃ先が思いやられるわ。ここはハイスクールとは違うのよ」

完全に弱ってしまった章の手を取り、コートの上から弾の当たっ

た場所を触っていく。章の痛がる様子に、怪我の程度の当たりをつけた。

「全く、しっかりしなさいよ……打撲ね。骨は折れてない。これなら学校生活にも支障はないでしょう」

「はい、多分大丈夫だと思います」

顔を顰めながら答える。彼女の何か言いたそうな視線には、気付かなかった。

「じゃあ行きましょうか」

キリサキはそう言って先を歩き、左耳に人指し指をあてる。

そこには骨伝導マイクロフォンがある。一見すると解らないが、通信用の機器である。相手側の声が振動で伝わる為、誰かに聞かれる心配がないのが特徴だ。

「フォワードワンよりキーパー。新人君が怪我したわ。恐らく打撲。応急処置の用意をお願い」

相手からの返答に答え、指を離れた。通信が終わったのだと察した章は、スクエア型のレンズが嵌めこまれた眼鏡のフレームの位置を直した。

「先輩、ちょっといいですか？」

おずおずといった様子で質問をすると、彼女が振り向いた。

「何？」

月光に照らされたそれを、彼は美しいと感じた。

「さっきの、銃弾を防いだ壁って術式ですよ」

「うん」

キリサキ——ベネディクト・アルカデルトは頷く。

「あのタイミングで、よく間に合いましたね」

術式というのは一種の学問である。それを『現代の魔法』や『特殊能力』と口にする人は多い。事実、そう言われてしまうような側面もあるので一概に誤解とは言えない。

「術式は紋章技術の塊よ。それを生み出したオリジナル・セブンの直系である私の性能が低かったら、良い笑い種だわ」

まあ家は捨てたけど——と。

自信過剰とも取れる調子に、章は特に含むものもなく苦笑を返した。異論は全くないのだ。

彼女はこの仕事にプライドを持っている。誰にも心を許さず、高く生きる孤高の存在。彼の眼にはそう映っていた。そしてそれは他の仲間達も同じなのだ。

けれど、独りぼっちだった過去を持つ彼は思う。思わずにはいられない。あまりに高い能力を持ち過ぎて、周囲と壁を作っている彼女に対して。

（独りぼっちは、寂しいよね）

そんな、愚にもつかないお節介を。

*

*

*

先月、この街にある高校の二学年に転校してきた章は、少し内気な性格もあってあまり友達も作れずにいた。当初は物珍しさに騒がれたものだが、二週間ほど経った今はそれも落ち着いてきている。生活に馴染み、数人だがクラスメイトと話せるようになった彼は、目立つと目立たないとに関わらず（後者ではあったが）クラスに溶け込んでいた。

特に彼を軸とした騒ぎも起きず。体型も平凡な中肉中背で人目を惹く事もない。部活動は美術部を選んだ。それについても突出した才能など欠片もない、普通そのものの画力。

周囲は、つまり、彼をそういう人間だと理解した。彼自身、そうなるように動いた。

しかし彼が特別、変わったところのない人間だと言ったら、嘘になる。彼もまたキリサキと同じく、特殊な力を使える才能を持っているからだ。

『学院』と呼ばれる特殊能力開発機構が、彼を育てた。世間から隔離された、日本のどこかにあるという教育機関だが、正確な場所は

それに関わる人間も知らない。そうした漏洩防止処置をされる。テロ行為や政治的問題の引き金になるとして、存在が秘匿されているのだ。

それだけ、現代の魔法使い——クラフトマスター術式使いは危険視されている。

章が次の授業の教科書を机に開き、窓の外を見ていると苗字を呼ぶ声が聞こえた。秋田君、というそれは少女のもので、声には心当たりがあつた。

クラスメイトの浅月という女子生徒。下の名前はまだ覚えていない。

「僕に用事？」

浅月は空いていた隣の席に座ると、見せ付けるように足を組んだ。「うん。昨日の続き。アンタの通つてた学校にもあつたんでしょ、あの話」

昨日の記憶を引っ張り出す。何か適当な噂話をした覚えがある。思い出して、頷いた。

「ああ、『天狗の高笑い』だね。人を魔道に引きずり込む——だなんて、昔話みたいでおかしな話だと思うよ」

そんな話——というと、浅月は生来の活発さを覗かせ、大げさに頷いた。

「でもさ、やっぱりこの街でもあるんだよ。何だか要領を得ない、よく解らない事件がさ。そうだな、例えば——新婚ホヤホヤの奥さんが旦那さんをナイフで刺し殺したり、生まれたばかりの赤ちゃんをマンションの屋上から落としたりするようなの。そういうのに限って、加害者は『愛していました』とか『とても大切な人でした』とかいう」

それが殺害の動機だというのはだから理解に苦しむ——浅月は軽く首を振る。

この事件の概要については、まだ謎の部分が多い。というよりも謎ばかりだ。

「他にも行方不明者がたまに出るくらいで、今はテレビでも取り上げる回数が減ったし、鮮度が落ちてきたのもあって、世間の眼は逸れてきたみたいだね」

章に人指し指を突きつけ、自信に溢れた顔をする。

「これってさ！ やっぱり噂の天狗が加害者に何かしてるんでしょ！ 人の心の闇を引き出す、とかなんかそんな話を聞いたんだ！」

それはないんじゃないかな、と苦笑を返しつつ、章は彼女の、元気に跳ねるポニーテールを眺めて、内心は違う事を考えていた。

（精神干渉か。やっぱりそっちの線なのかな。事件の首謀者と言われている天狗も、僕らと同じ術式使い——人の内面に干渉出来るというなら、そうであっても不思議じゃない）

しかしまだ確かな証拠もないので、そう決め付けるのは早計だな、と纏めた。

そんな話をしていると、横合いから声が掛かった。浅月の友人である、霧間という女子だ。

「マヤ。あんまり秋田君を困らせたらダメだよ。それより今日は放課後、小学校の案内してあげるんでしよう？」

霧間はカヤという名前なのを、浅月がマヤと呼ばれた事で思い出す。似ている名前だという事だけは覚えていた。

浅月に比べて、比べるまでもなく、霧間は穏やかな性根で大人しい性格をしている。章は彼女の後ろの席になる。背中の中ほどまである長い髪はいつも綺麗だと思ってしまう。

浅月が言葉を返す。しかし章に対してジト眼という形で疑いの視線が送られる。

「ああ、そうだった。でも学校見物とか、秋田君も物好きだねえ。もしかしてロリコンだったりする？」

「ち、違うよ！ 僕は純粹に知的好奇心から頼んだんだ！ それと学校を美術のモデルにするのに写真を撮りたいからだよ！」

思わず声を張り上げてしまったが、自分が建築物に対して興味を持っているという話を改めてすると、二人は頷いた。

「解ってるよ。でも子供好きっていうし、疑っちゃうじゃん？」

「それは君の心が病んでいる証拠だろうね」

「酷いな！ あたしは純粹だよ、夢見る乙女だよ！」

「純粹で夢見る乙女は子供好きとロリコンをイコールで結んだりしないと思う」

テレビなどでは成人男性が小学生の女子児童を騙して事件に発展した報道をよく目にする。そうしたニュースで浅月は先入観を抱いているのだろう。

「時代に踊らされているだけだよ！ そう、つまりマインドコントロール！」

「社会心理学的テクニクだと！？ 精神療養が必要だ！」

そこで、黙って微笑んでいた霧間が穏やかに口を出す。

「ろりこんって、なあに？」

純粹な乙女の見本である。

二人が黙りこんだのは言うまでもない。

* * *

章がこの学校でする事というのは、無論学生生活を満喫する事ではない。ここにも所属部署——外事四課の任務がある。屋上への扉を開けると、冷たい風を肌を感じた。閉めて壁を回り込み、日陰になっっている場所に腰を下ろした。

ノートパソコンを開く。ディスプレイにロムを差し込み、アプリケーションを起動させた。モニターに映ったのは学校にある食堂の厨房だ。映像を映す窓の二つめを呼び出し、そちらには食材を保存する倉庫内の様子が映される。

共に転校初日の深夜、章と同僚とで学校に忍び込み、監視用のカメラを設置してからの映像だ。倍速で早送りし、異常がないかを確認していく。

（何者かがこの学校の食糧に、あの薬物を混ぜ込んでいる可能性が

ある……か。擬似能力者の問題は余程根深いらしいね

『天狗の高笑い』事件に参与しているのではないかと黙される擬似能力者は、外事四課のみでなく地元警察のブラックリストにも載っている危険人物だ。術式や超能力を世間から隠蔽する役割を持つている章達は、こうした擬似能力者の拡散を防ぐ為にテログループを調査したのだが、残念ながらめぼしい成果はあがらなかった。

そして、映像に変化を認めた。

（彼は……）

学校の制服ではない。黒いフード付きパーカーを深く被り、紺色のカーゴパンツという私服ではあるが、彼はその少年を——眼を細めて観察した。

（あの手に持つてる白いのは、恐らくColorの粉末を閉じた包装……やはり深夜に忍び込んで、混ぜ込んでたワケか）

このColorという粉末が、先日の特ログループがこの街にばら撒いているとされる薬物だ。近年急速に広まってきたMDMAの亜種とされるが、幻覚や幻聴の類はないという。問題なのは精神依存性と、その精神に特別な力を与える、というもの。

章やキリサキが持つ、術式の力に近いものだ。それを薬物で手っ取り早く入手出来る薬。

しかしそれにも問題がある。本来あり得ない周波数に脳のチャンネルを開き、何の訓練も受けずに^{エネルギー}霊子放射光を享受する為、自分でも知らないうちに精神がボロボロにされてしまふ。運よく逃れたとしても、霊疾病という霊障にかかってしまふ。

『学院』で専門の訓練を受けた術式使いでも、長時間霊子放射光に晒されれば命の危険がある。彼はモニターに映る少年から少しでも情報を得ようと、繰り返し映像を流した。

（ダメだな……これ以上は僕の方じゃ解らない。一度ジェイクさんの方へ送ろう）

ズボンのポケットから携帯型情報端末（携帯電話のようなものが細部が異なる）を取り出し、アドレスからジェイク・マティアス

を呼び出した。

ほどなくして相手が出る。

『あいよ、どうした少年』

軽い調子でそう言うのは若い男の声だ。年齢は二十三歳だと以前聞いた事を思い出す。

「今学校にいるんですけど、設置したカメラの映像に不審な人物が映っていました。そちらに送ります」

『あー……それはいいけど。そういう事を学校で喋っちゃマズインじゃないの？ ほら、周りに防音設備とかある個室なら別だけどさ。誰かに聞かれたら大変じゃん』

「あ……！」

どきりとして周囲を見回す。このあたり、新人としての詰めของ甘さが表れた形だろう。

『その様子じゃマズったなあ？ 知らねえぞー、課長に怒られてもほら、さっさと切ってデータ送って退散、退散』

「は、はい、すみません」

慌てて言う通りにし、データ送信完了の文字を見てノートPCを閉じると、同時に声をかけられた。壁の向こうから覗き込んでいるのはクラスメイトの霧間力ヤだ。

長い髪が風に吹かれて靡くのを、片手で押さえている。

「秋田君、何してるんですか？」

「あ、いや、ええと、そう、パソコンでニュースを見てたんだ」

「ニュース？ ああ、そういうえば教室でそんな話をしてましたね」（良かった、デマカセだったけどなんとか誤魔化せそうだ）

勝手に都合よく解釈してくれた霧間に内心罪悪感を感じ、心の中で謝罪した。

「それで、霧間さんはどうしてこんなところに？」

「ええ、実は秋田君にお話がありまして」

「何かな」

霧間は章のすぐ隣まで来ると、眼線が同じになるよう膝を折って

屈んだ。

「実は……私も一緒に、小学校の見学に行きたいんです」

「へえ。霧間さんも建築物に興味あるの？ ああでも、案内するのは僕じゃなくて浅月さんだから、彼女に聞いてみたらいいんじゃないかな」

そう言つと、霧間は照れたように視線を逸らした。左分けの前髪がさらと揺れる。

「マヤには、もう言つてあるんです。そうしたら、秋田君に聞いてみてつて言われて」

「ああ、それで僕を探して」

章は内心びくつきながらも本題に入った。

「それで、さ。僕が何か言つてたか、聞こえた？」

「え？ うーん、声が聞こえたぐらいで、内容までは。外だと声が拡散しますし、壁越しだったから」

「ああ、成る程。そつか、それならいいんだ。変な事聞いてごめんね。独り言のクセがあつてさ」

霧間は、柔らかく微笑んだ。整つた美貌と雰囲気もあり、心が癒される感覚を覚える。

「そうなんですか。実は私もお風呂とかでちよつと独り言が出ちゃうんですよね」

適当に相槌を打つ。嘘を重ねる事に罪悪感はあるが、巻き込みたくない、という義務感がそれに勝つた。

第二章 靈障の眼

第二章 靈障の眼

高校の授業が終わると、浅月と霧間に同行する形で近くの小学校へと向かった。両手に花という状況に、しかし鼻を伸ばせる程の余裕はない。

章が小学校の建物を気にするのは被写体というが、もちろんそれだけではない。そこに勤めている先生方から話を聞く必要があるからだ。

つまり。彼は調査の一環として浅月を利用した事になる。罪悪感が湧く。

「浅月さん。何か欲しいものはない？」

それを、物を与える事で埋められるとは思っていないが——自分の心を慰める為の卑しい発想だと解ってはいるが、そうする事で眼を逸らす事にした。

「ん？ ああ、あそこのコンビニ？ そうだなあ。ちょっと歩くと飲み物ぐらいは欲しいよね」

まだ友達と呼べる程親密ではない。けれども、積み重なる嘘に心が痛んだ。浅月が言葉を続ける。

「けれど意外だなー。カヤがついて来たいなんて言うとは思わなかったよ。小学校なんて見るところないのにさ」

そうかな、と首を傾げる霧間に、視線を向ける。

思えば、霧間が何の部活動に所属しているかをまだ知らない。少し興味が湧いた。

「霧間さんって部活動は何やってるの？」

「私は吹奏楽部ですよ。秋田君は美術部ですよ」

「え、ああ、うん。全然下手なんだけど……でもそっか、吹奏楽。何だか管楽器や弦楽器のイメージが湧くなあ」

優雅にサクソフォンやヴァイオリンなどを弾いている姿を想像出来た。

「あ、ちょっと当たりです。フルートなんですよ」

木管楽器ですけどね、というと、浅月が口を挟んできた。

「カヤはお嬢様だもんね」

霧間は困ったように笑う。章はそれで、所作の端々に見る霧間の上品さに納得した。

フルートというのも優雅さに輪をかける。

「マヤ。私がそう言われるの嫌いだって知ってるでしょ」

「ごめん、ちよつとした僻み。でも男性恐怖症のカヤがそこまで男子と仲良くしてるの、初めて見るけど大丈夫なの？」

章は少し驚き、霧間を見る。心なしか距離が近かった。

「そうなの？ ごめん、解らなくて。怖かったかな」

「ち、違うの、違う」

真っ赤になって手を振る。霧間は少し距離を取った。章は、それが少し寂しかった。

寂しいと感じた自分を、二人を利用しているのに勝手だな、と自虐する。

「何だか秋田君は話しやすくて。それに、優しいし……怖くないから」

俯いてしまった霧間の言葉は徐々に小さくなり、最後の一言もようやく聞き取れた程度だ。

「そ、そうなんだ。良かったよ」

「うん。秋田君は、怖くない」

やんわりと微笑む霧間は、夕陽に照らされて、章には眩しく映った。

「ぶーぶー。二人の世界に入らないでください。何でコンビニの前でラブ空間作ってんのさ、アンタ達の青春は税込み四百九十八円ぐらいですか？」

「ワンコイン！？ 君ね、僕はいいけど霧間さんに失礼だよ！」

「いや、お買い得だと思っよ」

「だから失礼だって！ 礼を失してるんだって気付いてよ！
君ならそれが出来るから！」

「まああたしの愛は軽くアンタ達の倍ぐらいするね、あたし尽くす
タイプだから」

「まず僕らに礼を尽くしてくれ……あれ、そういえば浅月さんは」
尽くすタイプというのには聞き覚えがあった。

「そう！ 絶賛片思い中なのです！」

空を指差して自信満々に言い放つ浅月。章もそれは以前聞いていたが、相手が誰なのかは知らない。霧間が後ろからフォローを入れた。

「隣のクラスの吉田君が好きなんだって」

「よっちゃんだよ！ 吉田で下の名前も頭が『よし』だから、よし
よしのよっちゃん！」

「三十円じゃん」

「イカじゃねえー！」

鋭く踏み込んだボディブローを受けて、思わずうずくまる。

「あ、秋田君！？」

「ぐふっ……いいパンチだ……ぼ、僕の事は構わず、先に行ってく
れ……」

「言っとくけど自業自得だからね。馬鹿にしたお詫びにおこらせる
んだから」

よっちゃんイカをか、とは怖くて言えなかった。

浅月は先に店内へ入っていく。霧間はまだ迷って右往左往している。

「ええと、どうしよう……あの、秋田君。片思いしてる子にああいう
事を言うのは少し、失礼なんじゃないかな」

考えた方がいいと思う、と。

「僕が……そうか、礼を失していたのは、僕だったか……」
おかげで大事な事に気付けたよ、と。

「因果応報の理に辿り着けた気がする」

「行きましょう？」

「うん」

母親に促される子供のように、彼は店内に入っただけだった。

*

*

*

それから^{つつがな}は恙無く小学校に辿り着き、見学をする事が出来た。途中で浅月から聞いた（在学中の担任だったという）男性教師を職員室に尋ねて、例の話も聞き出せた。

先生と二人で話があるから、と二人に断る。

もう暗くなってきた事もあり先に帰らせた。

「あの行方不明事件か。ローカル放送では天狗ばかり取り上げられてるけど、そっちの方も結構被害者は多いらしいね。小さい子供までというのだから酷い話だ。子供達のご両親は今も藁を掴む思いで探し回ってるだろうと思うと、胸が痛むよ」

俺も二児の父でね、と続けた男性教師は、無念そうに顔を伏せる。「ウチの学校でも、ここ数年で十人前後の生徒が行方不明になっている。近隣の学校、特に小学校と中学校が多いらしい。神隠しなんだろうかね」

言い終えると、章の顔を覗きこんだ。

「でもどうしてそんな事を？ それに君、この学校の出じゃないよね」

「僕は――」

意を決して、章は鞆から取り出した手帳を見せた。長方形の黒いカバー、表紙の中心少し上には金色に輝く桜の代紋。

「け、警察」

「外事四課所属の者です。貴重なご意見ありがとうございます。後つきましては行方不明者のリスト作成を取り急ぎお願いします。後日報酬は払い込ませてまいりますので、こちらの用紙に口座番号の

記載を。それと、この事はどうか内密にお願いします」

「き、君、大人をからかってるんだろ」

ここで、章は頭のスイッチを切り替える。これは交渉だ。毅然とした態度で相手と向き合い、譲かせなくてはならない。威圧や迫力といったものは章にはないが、眼力——眼で訴える事だけは出来た。『眼』の力で場を支配する——有名な俳優や歌舞伎役者とも通じるそれは『話を聞かせる』という高度な駆け引きの技術なのだ。

「申し訳ありませんが外事四課は内務省の直轄です。もしこの事が外部に漏れた場合、貴方と貴方のご家族には社会的な制裁が加えられるとご理解下さい。二度と社会復帰は出来ません。ですがそちらが制約を守る以上、外事四課及び脳医学研究所『ウェンズデイ』が全面的なバックアップを約束致します。この制約を受け入れて下さるのなら、こちらの書類にサインをお願いします」

男性教師はまだ現実感が欠落しているのか、啞然としていた。

それも無理はない。一介の高校生が持ち出してくるような話ではないのだ。驚いて何を言われているか解らないだろう。

信じられない——そんな表情を見て、あと一押し足りないと感じる。

まだ信憑性が弱い。ダメ押しの一手がいる。

「保証をお疑いでしたらこちらの電話番号にコールを。オペレーター完璧な対応を約束します。それでもまだ疑うのであれば、報酬を小切手で前渡しさせていただきますでしょうか。そうですね……これくらいでいかがでしょう」

鞆から次々と書類を取り出しては教師の前に並べ、最後には支払委託証券である。しかもその額がまたおかしい。教師一か月分の収入より、ゼロが二つ多かった。

リストを作り、この事について口を噤んでいるだけで大金が手に入るのだ。彼にとってリスクは無いに等しい。

子供を導く立場である男性教師の眼がくすみ、サインをしてしまったとしても責める者はそこにいなかった。

うまくいった、と章は安心した。

相手が子供をもつと見下してかかる相手だったらまずかったかも知れないという実感はあった。あの男性教師の人の善さを突いてしまった形に、罪悪感がまた積み重なる。

（眼は口ほどに物を言う……だったっけ）

交渉術などは心得ていなかったが、物事に対する姿勢を上司から教わっている。その際に教わった言葉だ。ひとまずの成功に胸を撫で下ろす。

夜に近付き、暗くなった道を辿って仮居へと向かった。小学校の職員室に残された男性教師には使い捨てのアドレスを伝えてきたので、リストは完成し次第章のノートパソコンに送られてくる手筈になっている。

人気のない道を歩いていると——午後七時以降の外出禁止令が発令されている——ポケットの中で携帯型情報端末であるPDAが着信を告げた。通話に出る。

「はい、何でしょうか」

「今から迎えに行くわ。ウェンズデイ支社の人が君に用事ですって」
声の主はベネディクトだった。ウェンズデイ側から外事四課でなく、直接個人への接触というのは珍しい。

「ウェンズデイが、僕に？」

「今、アンデイと警察署で待ってもらってる。」

「何でも君に頼みたいものがあるんですって」

「はあ……解りました」

「それじゃ」

ウェンズデイは外事四課のバックアップを担当する組織だ。様々な武器、情報、人材の派遣などで支援されている背景がある。脳医学研究所という看板を掲げていても、ただの研究^{ラボ}所ではないのだ。巨大な実体を隠し、外事四課を生み出して内務省と直結させた実績もある。

「しかし、僕に頼みたいものって何だろう」

——ぞく、と首の後ろが騒いだ。はつと後ろを振り向く。

彼の眼には夜の暗闇に包まれた家々の風景に、不気味なものが混じって見えた。

術式使い故の特異体質。この世に在らざるモノが見えるという、それは霊視に近い。

ある一軒家の赤い屋根。そこに黒い影が凝って見えた。章は、しかしそれに心当たりがある。術式使いの敵——人間の対となる、人外と呼ばれるモノだ。

（あれは、レギオンか）

人外というカテゴリーの中でも下位存在として位置付けられる名称を呼び起こした。民家の屋根に居座るレギオンは、特に何をするでもなく、犬でいう『おすわり』をしている。

赤く輝く二つの眼は、夜の闇の中、不気味に尾を引く。成人男性の平均よりも一回り大柄な体格に、五指の爪を供える四肢がある。

首から下は人間に近いフォルムだが、狼獣類が持つしなやかさも持っている、現実には存在しない、人間と狼、二種間の複合的なシルエットだ。

レギオンは赤い瞳を静かに輝かせ、目測五十メートルほど向こうから、章を見つけた。

じつと、睨み合う。背筋に嫌な汗をかいた。

眼を、逸らせない。

（大丈夫だ、相手は敵意を持ってない。

こちらに変な動きを見せなければ、彼らは襲って来ない）

果たして章の思った通り、一体のレギオンは攻撃的な意識を向けてくる事もせず、興味を失ったようにゆっくりと去っていった。

（ふう……良かった。もし襲われてたら、やばかったな）

レギオンが下位存在とは言え、その戦闘力は常人を軽く超える。特に目を瞪るのはそのスピードだ。アフリカなどに住む獰猛な肉食

獣が、街中に放置されているようなものである。術式使いが専門で事に当たる程の危険性を持っている。

彼らを倒すのは、通常の銃火器では難しい。今のところの対策としては特殊な加工を施し、高名な巫女に祈祷してもらった特注の『水銀弾頭』が外事四課では主に用いられる。

（彼らの体は霊子^{マナ}の塊だ。通常弾頭ではたちどころに再生してしまうし、近接格闘も効果は薄い）

しかし人間を捕食するという性質が、それ程頻繁に行われない事が幸いである。人外は受動的な性質を持つが、術式や超能力などの霊子に関する動きがあれば、活動が活発化するという習性を持つ。

つまり霊子を使う性質を持つ術式や超能力を使用しなければ、彼らは襲つてこない。逆を言えば、そうして『場』を乱す者には一切の躊躇なく攻撃を仕掛けてくる面を持つ。

だが。彼らの体を傷つけるのに最も適した攻撃方法が、術式と超能力であるというのもまた厳然たる事実として存在する。

本来関わり合わないはずの存在——人間と人外は住み分けられていたのに、その均衡を自ら破ったのは、人間からだった。

『オリジナル・セブン』と今では伝えられる、世界で初めて霊子^{マナ}を発見し、それを実用化した集団。彼らは深淵を覗き込み、またその深淵に触れた賢者達である。

若しくは。

彼らこそが不必要な争いの火種をこの世に持ち込んだ、愚者であると人は言つ。

しばらくしてベネディクトと合流する。彼女の乗ってきたセダンに同乗して、地元警察署へと向かった。運転席に座る彼女は、トレードマークの赤いジャケット（ショートブルゾン）を羽織っている。下には黒いセーターだ。

下衣は、ポリシーなのかロングスカート。彼女お付きのメイド曰く、同じものを何着も持っているそうだ。これは『戦地で目立つ』

という事、つまり人目を惹くのを目的とした衣装だという。理由については、まだ解らない。

「向こうが僕に頼みたいことって何でしょうね」

「話の触りを聞いた限りでは、魔導器のテストらしいわ」

聞き慣れない単語に思わずシートから背を起こし、驚きの声をあげた。

アイディファクト

「魔導器！？ 固定概念を撃ち出すっていうあの事象兵器ですか！」

「まあ、詳しい事は向こうの人が説明してくれるでしょ」

魔導器は十年前のアメリカ独立記念日に実戦投入されてから、その立場を確立してきた新カテゴリーの携行兵器である。

代替可能な多数によって使用可能とされ、ウェンズデイでは量産を期待されて現在も配備が進められている。しかし製造の困難さと素材調達の難、更に内包概念の不安定さによって安定供給はまだ望めそうにない。

章はウェンズデイが自分にテストを依頼してくるというそれに、期待と不安の入り混じった気持ちを抱いた。

車でおよそ十五分ほど大通りを走ると、警察署の白い建物が見えてきた。夜なので窓には明かりが見えるが、幾つか点灯していないのも見当たる。

署の門を過ぎて駐車場に車を止めると、ベネディクトはさっさと車を降りて先を歩いた。その後ろを慌ててついていくと、ロビーに同僚が待っていた。

軽くウェーブのかかった長い金髪の女性は、二十一歳という年齢よりも大人びて見える。グラマラスな体型をスーツ姿で包み、挑発するような笑みを口元に湛えた、その人物は声をかけてきた。

「ようやく来たわね、ベネディクト。それと、少年君」

ベネディクトは答える。

「待たせたかしら、アンディ。ウェンズデイの人は？ 見当たらないんだけど」

アンディと呼ばれた背の高い女性は、章の前まで来るとその眼鏡

を奪い、自分に掛けた。生来の気質からか悪戯好きだという。章はこの女性に毎回からかわれて、その度に困っている。

「か、返して下さい」

「あら、じゃあ自分で取り返してみなさい」

眼鏡を、見せびらかすように開けていた胸元へと滑り込ませる。

流石に手を伸ばすのは躊躇われた。そうしているとベネディクトが横から奪う。

豊かに過ぎるそれに嫉妬の視線を送ったのを、章は視界の端で見失ってしまった。

「下らない事してないで、答えなさい」

「ベネディクトったらカリカリして。ウェンズデイの人なら私に説明だけして帰ったわよ」

「帰った？ はあ、全く。仕事意識の希薄な人間なんて寄越さないで欲しいわ」

アンディは陽気に笑った。とは言っても、つとめて静かな笑い声である。

「ま、概略は下で話すわ。地下の射撃演習場を借りてるから、話はそこでしましょっか」

射撃場は開けた場所だった。本来なら必要時以外は立ち入れない、銃器保管所と防弾硝子で区切られた、空気のひんやりした空間。

アンディが説明を始める。章の腰くらいの位置になるテーブルの天板には一つのケースが置かれていた。黒い。

「そのケースに魔導器が入ってるわ。指紋認証の後に多重ロックを外して」

「はい」

「ああ、その前に——少年君。ビリー・ザ・キッドは好きかしら？」
いきなりの質問に素っ頓狂な声をあげてしまったのは、仕方ないだろう。

「箱を開けて」

ベネディクトが促したので、テーブルに置かれたケースを手順通りに開けていく。

「これは」

中に収められていたのは、一挺の拳銃だ。

それも、かなり大きい。回転弾倉式リボルバーの大型拳銃。

「持ってみて」

手に取ってよく観察すると――かなり重い――異様なその姿がよく解る。黒光りする銃身は上下に二つあり、弾倉まで肉厚の長方形を作っている。時計で言うなら十二時と六時の場所から弾が発射される形だ。直線を多用された鋭角的な一体型銃身――と形容出来る。弾丸の雷管を叩く撃鉄ハンマーも、上下二段式の特別製。一度引き金を引けば、二発が同時に出るのは容易に想像出来た。

アンディが、説明を続ける。

「ツインバレル・シングルハンマーシステム。人外に水銀弾頭を一度に二発撃ち込める、クレイジーな銃よ。シングルアクション、左のスリングアウト式ね」

その隣に立つベネディクトは冷たく言い捨てた。

「何それ。頭がおかしいとしか思えないわ。実用性皆無じゃない」
私もそう思う、とアンディは答えて。

「45口径（太さ11.4mm）、使用弾薬は専用の.454 Casull S&W Sorcererね。その箱の隅に入ってない？」

見れば、銃器本体の収められた場所から左下に弾が六発、きちんと並んで収納されている。全体が銀色の弾丸だ。

「あります」

「じゃあ、それを装填。正面の敵に向けて射撃。このあたりは訓練でさんざんやったから、大丈夫よね？ 何か質問はある？」

返事を返す。やはり、幾つか気になる点があった。

「これは何故、二発同時なんですか？ 見れば六連装です。これじや三回しか撃てませんよ」

本体の中心には、野球で使われる硬球ほどの大きさもある弾倉シリンダーが

鎮座している。これはあまりに異質だ、という思考が働いた。

「んー。単純にストッピングパワーが二倍になるからじゃない？
突進してくる人外を、術式を使わずに止めるには、このくらいじゃないとダメだから、とか」

アンディが答えを持ち合わせていないのを理解し、その問題はひとまず棚上げとする。

「これを撃つのが、ウェンズデイから僕への依頼ですか？」

銃をしげしげと眺めつつ。

「そう。この魔導器、サンダーは『学院』側から直接の指示があつて君に頼まれたの。まあつまりは、学院長直々の命令よね」

学院。章やベネディクトがかつて学び舎とした術式使いの養成機関とも言える場所である。日本の術式使いは例外なく、ここで育つのだ。

その学院長とは、つまり彼らの主とされる存在。命令は絶対で、逆らえば再教育という厳罰を与えられる。

しかし章にとっては優しい言葉をかけてくれる、実の父親のような存在だった。

「父さん、じゃなかった、学院長が、ですか」

両親のいない彼にとって、厳しい学院生活の中、学院長の存在は心の拠り所だった。その声に喜びが混じるのも無理はない。

その言葉に眉を顰めつつ、ベネディクトは腕を組んで言った。

「撃つてみなさい。反動の規模と命中精度が知りたいわ。それじゃ精密射撃は望むべくもないと思うけれど。全く、拳銃にツインバレルなんて頭のネジが外れてるったら」

射撃用の耳あて（イヤーマフという）をつけて、彼女は下がった。先に章へ耳あてを手渡していたアンディは金髪を靡かせつつ、ターゲット板の制御を行う。

まず右足を引き、体を開く。半身はんみとなつて右手を真つ直ぐターゲットに伸ばし、右肩に頬をあてる形で照門と照星を合わせた。左手でグリップエンドを包むように握るのも忘れてはいない。撃鉄ハンマーを、

起こす。

およそ二十メートル先に立つ、人の上半身を模したターゲット板に向けて狙いを合わせると、引き金を――引いた。

乾いた爆発音はまるで落雷だ。腕は大きく上に跳ね上がり、体も大きく仰け反る。眼の前が銃火の瞬きで覆われ、右手の親指の付け根に激痛が走る。腕がもげたかとさえ思うほどの、それは反動だった。硝煙が銃口から吐き出される中、右手のダメージに銃を支えきれなくなつて取り落とす。

堪えきれずに蹲り、右手を押さえた。

「っ……い、たた」

焼けた火薬の臭いが、鼻に届く。

「大丈夫？」

ベネディクトが駆け寄る。頷きで返した。

痛みで章が取り落とした銃を握る。ずしりとした重さを感じつつ、彼女は銃をテーブルに置いた。

「手を見せて。右手、痛いでしょう？」

「は、はい」

「アンディ。こんなものを実戦で使うのは無理……いえ、不可能よ。いかに彼がこの魔導器のテストを任されたと言っても、使えなければ意味はない。ウェンズデイにはそう伝えておいて」

アンディは、憂鬱そうに首を振った。横に、である。

「撃てたつて事は、使えるという事らしいよ。その子にしか撃てない、んだつてさ」

手当てをしましょう、と促され、立ち上がる。右手の感覚は半分麻痺していた。

「こんな欠陥品、テストしたところで結果なんか目に見えてる。反動が強すぎて制御出来ませんダメでした。それで終わりよ。」

大体こんなので何をさせるつもりなの。まあアンディに言っただけでしょうがない事だと思うけど、私達には術式がある。こんな使わなくなつて――」

ベネディクトは文句を垂れ続ける。アンディの横を通る際、彼女に声を掛けたのは章だ。

「術式で、反動を抑制する事は可能ですか？」

「無理よ。魔導器の内包概念に干渉して対消滅が起きちゃう。それは、術式使いなら当然の知識でしょう？」

魔導器の内包概念とは、術式にほど近いものだ。魔導器というハードウェアから、内包概念ガイストというソフトウェアが指向性を持たせた電子放射光を撃ち出し、事象変移を起こす。そうした携行兵器である。

術式も、電子放射光を用いて事象変移を成す理論体系だ。互いに異なる事象変移を起こそうとすれば、相互に食い合つて歪曲現象アニメーションへと変じてしまう。

サチュレートカリキュレーション
これは飽和演算現象とも言われる。

「そうでしたね、すみません……でも、何とかそれを使えるようになりたいです。学院長先生が僕に期待してくれたんですから。僕は、その気持ちに応えたいんです。ですから、テストは続行させて下さい。お願いします」

隣からは呆れた溜息が聞こえる。

「……何それ。意味解らない。こんなの使える訳ないでしょう。それ、格好よくも何ともないわよ。身の程を弁えなさい、新人」

「解っています。今の僕では無理だという事くらい。でも、必ず使えるようになってみせます。だからどうか、時間を下さい」

好きにすれば、と零して、章を促して地下射撃場を出て行く。

残されたアンディは、テーブルの上に置かれた黒色の銃を一瞥する。

「予定調和、か。これも学院長の思惑通りなのかしら。あの子もこの為に外事四課へ配属されたというのだから、不憫よね」

いいように使われる道具みたい——と、呟いた。

「まあ、気長にやりませんか。時間はいっぱいあるんだしね」

銃をガンケースにしまいながら、アンディはふつと微笑んだ。

第三章 意志

翌日の朝、登校時間より一時間ほど早く学校に行くと、まず校舎の裏にある食品搬入口に向かった。ここにはちょうどトラックがすっぽり入る一台分のスペースがあり、直接厨房とその食品保管庫に繋がっている仕組みだ。

監視カメラの録画媒体は天井裏に隠してある。天板を外してCDロムを取り出し、替えのものと交換して、そこを離れた。

教室につくと、ノートパソコンを開いて、昨夜遅くに使い捨てアドレスへ送られてきた行方不明者リストに目を通す。まだ誰も来ていないが、急がなくてはならない。視界の端に自分の右手が入る。テーピングが巻かれ、あまり動かさないようにと注意された事を思い出す。ああ見えて、ベネディクトは面倒見が良い。

リストには幼い子供の顔写真が並び、その一枚一枚に名前や住所が記載されている。行方不明になった時間帯も記してあった。登下校中。友達と遊びにいったまま。学校の休み時間。様々だった。時間帯にもばらつきがあり、共通点は見当たらない。

しかし、章には事件を起こしている犯人があのだテログループ『シヤンバラの子供達』であるという仮定があった。まだ証拠はないが、外事四課でもその方向で調査を進めている。

「……恐らくは」

誘拐である。近年、判明した事実によれば少年兵、少女兵の数が急増しているというのだ。

その中には証拠不十分で曖昧な情報——『超能力』^{モラトリウム}のようなものの目撃情報もある。疑似能力者として教育されている子供がいるのだろう。

昨今の銃器軽量化は著しい。開発技術の向上により、子供でも持てるような突撃銃や個人携行対戦車兵器が増えてきている。加えて体も小さい為、狙われにくい。

「……………」

そうした点を踏まえて考えた場合、やはり日本のような対テロ意識が低い国は兵力の補給源として狙われやすいのだ。

それがバレないように、表向きは比較的小さく見える行方不明事件として装い、隠している。その裏では数多くの子供達が連れ去られていく。

つまりこれが行方不明事件の真実であると、外事四課では見ている。

メンタルコントロール
(精神操作……いや、洗脳か)

配合比を変えたガンパウダーの投与により、トルエンなどを摂取させ、好戦的にする。依存症を起こさせて脱走を防ぎ、毎日戦争映画を見せ、教育し、兵士として作り変えていく。

そこに子供達の『意志』はない。

「意志……」

自分を動かす、我としての意志《will》が、そこにはないのだ。

ただ流されるまま、動かされる。

そしてそれは、自分も同じだ、と章は思った。

そうしていると、窓の外に生徒が登校してくる姿が映った。

(そろそろかな)

パソコンをしまつて、教科書類を取り出す。勉強する時間が少ないので、最低限の成績を維持するのは難しかった。

ふいにノートへ走らせていた腕を止め、昨夜の事を思い出す。

(サンダーっていったっけ。あの拳銃、本当にヤバイよな)

右手の親指付け根にまだ残る、鈍い痛みを和らげるようにさすった。

後に部屋へ送られてきたガンケースには解説書が添付されていたので、それに目を通した限りでは、アレに装填される弾丸は専用のもので、その弾丸でなければ魔導器は起動しないというのだ。しか

し口径が同じである、もつと反動の軽い弾丸を使用する事も出来るのが回転弾倉式の利点とされる。構造が単純なのだ。

リボルバー

オートマチック

それでいった場合、本来は自動拳銃用である45ACP弾（アメリカでは軍に制式採用されているポピュラーな大口径弾）を使えば実用に耐える反動に抑え、相応の威力も確保されるという事で、実質二種類の弾丸から選択して装填するスタイルとなる。

一発の威力を取るか、連続攻撃を取るか、といったところだろう。（しかし、魔導器としての特徴である事象変移……あの銃のそれは一体どんなものなんだろう）

アンディはそこまで説明してくれなかった上、解説書にも載っていないかったのだ。

しかし、その思考は肩を叩かれた事で中断される事になる。

振り向いた先にはクラスメイトの浅月がいた。端正な顔立ちであり、世間で言うところの美少女である。気さくで快活な性格もあり、友人は多いという。章に話しかけるのもその親しみやすい人柄が表れての事だろう。

「おはよ。難しい顔して、どした？」

「ん。特に何でもないよ」

「あれ？ 手、怪我してるじゃん。大丈夫？」

「ああ、これ。うん、手当てもしたし、問題ないよ」

「ふーん……あれから何かあったの」

「いや、ちよつとね。僕、抜けてるところがあつてさ」

恥を晒すのはちよつと——と誤魔化した。

すると、浅月は顔を顰める。といつても、章に対して不快感を抱いたというわけではないようである。

「あー、私も今日はちよつと具合悪くてさ。頭痛いんだよね。知恵熱かも」

体育は出るけど、と。

「具合悪いのに大丈夫なのかい、あんまり無理しないほうが」「考えとく」

予鈴が鳴り、見渡せばクラスメイトの大半が登校してきている。後ろの扉から霧間力ヤが入ってくるのも見えた。

彼女に挨拶をしつつも、今日は学校が終わってから、あの男性教師に聞いたところの中学校を尋ねてみようと考えていた。

昼休み、先日のように屋上の壁になる場所で、監視カメラの映像データを確認した後（やはりフードを深く被った少年が映っていた）教室へ向かっていると、廊下の途中でクラスメイトの浅月を見かけた。頭の後ろの一条縛りを元気に跳ねさせて、話している相手は男子生徒である。

（あれは、もしかして話に聞いた吉田君かな）

明るく、嬉しそうに笑っている彼女はとても幸せそうである。相手の男子生徒も彼女との会話を楽しんでいるようで、壁に手をつきながら笑っていた。

制服の裾を引っ張られる感触に振り返ると、霧間力ヤがいた。やはり彼女の長い髪はいつ見ても綺麗だ、と思ってしまう。

「邪魔しちゃダメだよ」

「しないよ。そこまで野暮じゃないって」

穏やかな微笑みを湛える彼女に、尋ねる。

「あの人が、吉田君？」

「そう、よっちゃん。吉田義男君っていうんだって。私はまだ話した事ないんだけど」

「そうなんだ——でもそのほうがいいかもね。変な嫉妬されちゃうよりは」

「え？ うん、そうだね」

「でもさっきまであんなにぐったりしてたのに。大丈夫なのかな」頭痛という話を思い出す。

「女の子だから」

それは理由にはなっていないんじゃないか、と内心思ったが、霧間がいうには『そういうもの』らしい。

「マヤが言ってたんだけど『てんしょんあげあげ』でいけば大丈夫らしいよ」

「……そ、そう、なんだ」

優等生であるところの霧間カヤが『乱れた日本語』を使う事に少なからず違和感を覚える。出来れば使ってほしくないな、と章が自分勝手ながら思ってしまうのは、女性幻想を持つ年頃の男子であれば無理もない事である。

「ところで『てんしょんあげあげ』って」

「あまり君には似合わない言葉だから知らないままでいいんじゃないかな！」

首を傾げる霧間の頭の上には？マークが見えそうだ。

章は廊下の端で話し込む二人にもう一度視線を送ってから、教室に戻ろう、と言った。

午後の授業が始まってすぐ、PDAが着信を告げた。手を上げて先生に適当な理由を話し、教室を出た。向かう先は屋上である。

陰になる場所（先日ノートパソコンを開いた所）についてから通話口に出た。

「はい、僕です」

『おう、昨日の事についてと、さっき送ってもらったデータだが』
相手はジェイク・マティアスだった。甘いものが偏執的に大好きという困った大人なイメージが章にはある。

「何か解りましたか？」

『ああ、フードの人物の尾行を担当した武田によると、ラ・ピュセルという繁華街にあるバーに裏口から入っていったらしい。そのバーは三階層まであるが、一般に開放されてるのは二階までだそうだが三階は完全に締め切られてるが、恐らく事務所。ロッカールームと兼用だろう。しかし武田が見たところ、一階のカウンター向こうにはドアがあったらしくて。それが従業員用の階段通路だとしても、奥には 下に下りる階段 が見えたんだと』

時間をずらして、何人かが降りていくのを見た——という。

「地下がある、と。課長は何て言ってますか？」

『現場指揮はキリサキに任せるとよ。デュドネ課長はキサラと出てる。今夜あたり戻るらしいが』

「解りました、先輩の指示を仰ぎます。ああ、それとジェイクさん」
『何だ？』

「吉田義男、という男子生徒の身辺調査をお願いします。どうやら、
彼が——」

ぐつと息を呑む。これを言葉にすれば、もう戻れないところまで事態が進んでしまう。自分がこの学園を去る時が、すぐそこまで近付いてきているのを感じた。

『シャンバラの工作員か？』

「——はい」

解った、というジェイクの返事はPDAを耳から離れた事で聞こえなかったが、意志《will》は伝わったのだと思い、通話を切る。

「もう戻れない……」

壁に背を預ける。

浅月マヤの想い人を、逮捕する為に外事四課は動き出した。そこから『シャンバラの子供達』へと繋がるだろう。隠れ家も判明している。

これで事件は終わるのだ。それを免罪符にする自分を、卑怯だと蔑んだ。

事件は、その時起こった。彼の耳に届いたのは、火災報知機のベル。

放課後、予定通り中学校へと向かう直前、章が教室で帰る用意をしている時だった。校舎内で火災が発生した、という放送にスピーカーを見上げる。しばらくして生徒達の悲鳴があがり、落ち着いて校庭に集合、という放送も小さく聞こえる。

「火事……どこから」

廊下を早足で進みながら放送を聞いていると、火の手は校舎の四階から（この校舎は四階層までである）あがったという。

（四階つて、）

放送はこう続けた。火元は音楽準備室と。

（――吹奏楽部の部室がある、場所）

今は放課後。部活動の時間。そして彼の知る限り、そこには彼女がいるはずなのだ。

すぐに折り返して、階段を駆け上がった。

多くの生徒とすれ違うが、通路や階段を埋め尽くす程ではないので章が進んでいくのにそれほど問題はなかった。四階の廊下に出ると、向こうから炎で包まれ、こちらに向けて進行してきていた。突き当たりでは音楽準備室と音楽室を飲み込んで、天井へとあがっている。火の回りが通常と比べて異常に早い。可燃物は多くても発火原因となる可能性のあるものが比較的少ない音楽準備室が火元というのも、章は素直に領けない。漏電か、とも考えたが、それではここまで拡がらない。こんな、音楽室から逃げる時間もない程の速度で炎が拡がるわけがないのだ。

「ゴホッ」

色々なものが焼ける嫌な臭いに少しむせる。遅れてきた教師が後ろで騒いでいる。音楽室に部員が取り残されているというのだ。

「くっ……」

煙が天井を這い、徐々に広がり始める。章は窓を開けようとしたが、しかしそれは火災が広がっていく速度を手助けしてしまう行いだ。

そうして迷う。章はその炎をじつと見る形で、だからこそ、その正体が解った。

（この火、まさか霊子^{エーテル}放射光で出来てるのか！？ そんな、だとしたらやっぱり疑似能力者がいるって事になる！ でも、こんな白昼^{モラトリウム}

堂々と？)

術式の起動式や展開式が発動すれば、それはいかに章が新人と言えど察知出来る。擬似能力者の超能力による事象干渉を目の当たりにするのは初めてだった為、気付くのに遅れた。

(だったら手はある。火元が音楽準備室なら、そこに擬似能力者がいる。その人を止めれば火は消える)

章はPDAを取り出して通話をかけた。

「スカウトワンよりキーパー、SOS要請。学校内で火災発生、擬

グノーシス・エフェクト

似能力者による霊的作用現象だと推定される。尚、室内に取り残された生徒がいる模様。こちらへの救助支援にあたられたし」

『キーパーよりスカウトワン、了解。直ちに向かう。貴官の救助については』

そこで通話を切る。人目につくのも構わず、防火用とかかれたバケツになみなみと張られている水を、頭から被った。背後では教師陣が騒いでいる。防火用シャッターが折り始めた。対応は良いが、これが超能力——ギフトと呼ばれる能力者のものであるなら、それは無意味だ。能力者の思うままに操られるギフトは、しかし現在、無作為に周囲を焼き尽くそうと荒れ狂っていた。

「どいて！」

教師達を下がらせ、脱いだ紺色のブレザーを盾にし、炎が湧き上がる廊下を走り抜けた。吸い込む空気が熱い。肺が焼けるようだ。喉が痛む。咳が出た。眼にも痛みが走り、開けていられない程の熱、刺激性の煙に涙を堪えて、音楽準備室の扉を蹴破った。

そこに居たのは——

「あ、浅月さん!？」

浅月マヤが、どこことなく正常でない眼つきで、肩越しにこちらを見る。

彼女の向こうで、窓に張り付くように怯えているのは。

「霧間さん! これは、まさか……」

霧間が叫んだ。

「秋田君！ どうして……いえ、マヤが変なの、火を、手から」

それだけで状況を察した章は、ブレザーを捨てて浅月マヤに掴みかかった。狂気を覗かせる表情に、とても見ていられないな、と心の中で思う。

「グウツ、」

「ごめんよ！」

近接格闘術を修めている彼に、薬によって能力を手に入れただけの少女が、接近戦で適う道理はない。勝機があるとすれば掌に煙らせている炎をぶつける事だが、それに関しても彼には対策がある。

章は浅月が拳を作って突き出してきた右腕を掴み（炎を纏っている為相当に熱い）一旦腰を思い切り沈めると、左腕を彼女の右足、膝の裏へ通し、肘を曲げて固定。腰を上げる。柔道の肩車のようにして、自分の背後目掛け、投げ落とす。浅月からすれば、前転をさせられたような形だ。

背中を強く打った浅月は大きく咳き込む。すぐには動けないだろう、と見て、霧間を見る。

「音楽室の人たちは、逃げたの？」

「ま、まだ。避難用のはしごが、壊れてるみたいで」

顔が青い。混乱と火災のショック、一酸化炭素。それらが重なっているのだろう、危険な状態である。

どうして浅月がここにいたのかは解らないが、今は音楽室の部員達を非難させるのが最優先だと考えた。

霧間の左側には音楽室へ直接出られる扉がある。ブレザーを回収してからそこを抜けると、おおそ二十名近い女子生徒と三名ほどの男子生徒がいた。

混乱が大きい。泣き喚く生徒、声を張り上げる生徒、携帯電話で誰かと話している生徒。様々だ。章は考える。避難用梯子が壊れているとすると、カーテンを取り外し、それらの端同士を結んで地上までの脱出経路とする方法が最も確実だ。

しかし、この火事は能力者によって引き起こされた、人為的な意^{イル}

志を持つ炎である。そんな暇は、既に無い。

(……やるしか、ないか)

ここでの目撃者は生徒のみだ。彼が『術式』を使っても、混乱した生徒の証言では信憑性が薄い。一酸化炭素中毒で幻覚を見たのだろつ、と思われるのが精々だ。酷な話ではあるが。

「霧間さん」

章は、眼鏡を外した。

「皆に廊下を通って逃げるように言っただ。多分、僕の言葉はあの人たちの耳に入らない」

「で、でも」

「僕が火を消して、道を作る」

音楽室の扉を、堅く閉ざされていた廊下へのそれを、開く。

灼熱の炎が燃え盛る。既に視界いっぱいまで拡がっているそれに、右手をかざした。後ろの部員達は悲鳴をあげる。

フォーミュラ・トランスフォーム

(公式変換)

起動式を組み上げ、展開式によって『世界の設計図』レコードへの干渉プログラムを構築する。周囲の霊子マナと自身の精神ゴーストを展開式内部で化合させ、霊子放射光エーテルによって霊的作用現象グノーシス・エフェクトが発生。

蒼い光が、通路を駆け抜ける。対消滅現象によって互いに食い合い、炎と蒼い光は消えていく。跡にはちらちらと小さな炎が、焼け焦げた壁の端々に燦る程度だ。

人が、通れる道が出来た。

目配せをする。霧間の、章としては初めて聞く事になる、大きく張り上げた声が音楽室に響いた。

「逃げましょう！」

部員達は、我先にとひた走る。章が何かしたというのは、命の危険より考える優先度が低いのは、彼にとって幸いだった。

窓の外からはヘリコプターのローターが生む、ばたばたという鼓膜が破れる程の爆音が聞こえてくる。窓硝子がびりびり震えた。

外事四課のものだ。救助がきたのだろつ。火傷した生徒や煙を吸

い込んでしまった生徒の救護にあたり、消火用の装備を備えた隊員も乗っている為、消防隊と連携を取るはずである。

章は、しかしまだ逃げずに残っている、霧間に声を掛ける。

「早く行くんだ。浅月さんなら、大丈夫だから」

「で、でも。秋田君、貴方の、その眼は」

それは、霧間は知らないが、彼が術式使いだからという言い訳だけでは誤魔化せない現象だ。彼の眼は術式を使う際、蒼く輝く特異体質を有している。

生まれ持った天性。これがあの『サンダー』を撃てる因子ファクターとなる。

「うん。僕は、こういう人間なんだ」

「こ、こういうって」

「怖いだろ。さあ、早く逃げるんだ。でないと——」

音楽準備室への扉が、内側から弾け飛んだ。

浅月が、本来なら元気に跳ねさせているはずのポニーテールでなく、解けた髪をそのままに章を睨んだ。その背後にいる霧間をも、憎しみの眼で。

炎が、彼女を巻き込むように渦巻いている。

「カヤ……アンタだけは……」

腹の底から搾り出した、重い声。ずしりと、心に押し掛かってくるような言葉だ。

「いつも、あたしを馬鹿にして……」

霧間は、それにシヨックを受けた。否定する為に口を開く。

「違う、私、馬鹿になんてしてない！ 大切な友達にそんな事思わないよ！」

章は、少し傍観する事にした。無論今の浅月が危険な事は変わらない為、少しでもおかしな動きを見せたら術式を使っても止めるつもりはある。

ただ、彼女——今の浅月はcolorによってなのか、心の奥に隠していた想い——自分でも知らないうちに抱いていた心の底が表

面化している。

元来、術式の設計や超能力のギフトはそうした心の形を源に、力へ変える性質がある。一度、力に振り回されれば——それに伴って心の奥底が引きずり出されてしまうのは、自明の理だった。

そうして自分の本当の気持ちをぶつけ合うのも、今の二人には必要だと感じたのだ。

「カヤ。いつもあたしを蔑んで、優越感に浸ってたんでしょ」

日頃抱いていた霧間への劣等コンプレックス。それが彼女の深層意識となり、憎悪の炎として具現した。

「見た目、成績、家柄……全部、あたしと比べて、自分が上だっと思ってたんでしょ」

「マヤ！ それは違うよ、私はいつもマヤに憧れてた。誰とでもすぐ仲良くなれて、皆に優しく出来るマヤをすごいと思ってた。それなのに、どうしてそんな事を言うの？」

「アンタばかり！ 教師に優遇されて、男にちやほやされて——いつも隣でそれを見せ付けられて、いなくなればいいと、思うなってほうが無理でしょう——！」

炎が勢いを増す。能力が、彼女の制御を離れかけている。暴走の危険性があった。

「マヤ、」

「うるさい、うるさい！ アンタなんか、いないほうがいいんだ！ アンタはあたしを追い詰める、居るだけで傷つける！

だから、あたしがアンタを、消してやる！」

ここまでか、と章は前に出る。

「下がって。彼女は耳を閉ざした。心の殻に籠ってしまったんだ。もう声は届かないよ」

「秋田君……」

手に持っていたブレザーに防御用の術式を施し、霧間に手渡す。

「——友達か。羨ましいよ」

ついに僕は最後まで、君達と友達にはなれなかったね、と。

そんな言葉を、霧間カヤは聞いた気がした。

浅月に駆け寄り、掴みかかると、彼女を包んでいた炎が消し飛ぶ。章の眼が、青い輝きを増す。蒼と赤の霊子放射光があたりに渦巻き、互いにぶつかりあい、白雪が舞うように落ちていく。

対消滅現象は、相手の霊子放射光の規模を上回れば、干渉規模は減衰するが貫く事が出来る。章は彼女の両腕を掴んでいる掌から、じりじりと焼かれていく痛みに顔を歪めた。

（力の規模は僕より上か！ 押し切られたら、まずいな）

頬を汗が伝う。ここには銃も魔導器も無い。彼自身の力が、試される。

浅月が痺れを切らし、体勢を崩しながらも蹴りを放つ。右脇腹に突き刺さり、肺から息が搾り出された。手を離してしまい、距離を取られる。

浅月が叫びと共に右手を、すくいあげるように下から振り上げた。炎の波が生まれ、局所的な津波となって章は飲み込まれる。背後になったグランドピアノが燃え始め、床のカーペットが炎の規模を一層広げていく。

炎の津波が去ると、章は術式で壁を作り、防いでいたのが解った。理論のおおよそはベネディクトのものと同じである。

（中距離以上では術式を構築しなければならぬプロセスもあって、スピードで負ける。パワーは言わずもがな、あっちが有利）

端から術式使いは不利なのだ。超能力者^{カロード}という、念じるだけで力を使える相手には。

やはり接近戦しかない、と結論する。彼にとって少女に手を上げるのはとてつもない抵抗と罪悪感があるが、このままでは霧間にまで被害が及ぶ可能性がある。

（守らなきゃ……僕がやらなければ、彼女まで危ないんだ。

大丈夫。人を殺すよりは、いい）

暴力でなければ、人を守れない事もある。それは先日、味わっている。あの時ベネディクトが撃ってくれなければ、二人共死んでい

たかも知れないのだから。

駆け寄る。今度は、確固とした決意を以って、彼女を倒す為に進む。

炎を纏わせた拳打、蹴撃を腕を立てる事で防御し、身を引こうとする相手の足を払う。転んで尻餅をつく浅月に覆いかぶさり、鳩尾目掛けて拳を振り上げ。

打ち込んだ。苦鳴を漏らす。手応えはあった。身を離し、様子を伺う。

浅月は、気を失う寸前。一筋の涙を零しながら。

「カヤ、ごめんね……」

そう呟いた。

章は深く息を吐き、腰を下ろす。救助隊が来るまではここにいないければならない。浅月は犯罪者なのだ、逮捕するのが義務となる。

霧間は何も言わない。ただ青ざめた顔で浅月マヤを見ていた。

章はほんの少し迷ったが、結局言う事にした。

「マインドコントロールは、解けたみたい」

天狗ではないかもだけど、とは、付け加えずに。

事件を振り返る。

恐らく死者は出ていない事だろう。対処が早かったのは幸いだっただ。最上階となる四階だったのも煙による被害が小さかった要因としてある。

彼女は外事四課からウエンスデイに引き渡され、専門の治療を受ける事で日常社会に戻る事が出来る。それには、そう時間は掛からないだろう。

問題は、二人の絆だった。これから先、浅月マヤが霧間カヤを受け入れられるか。それだけが章は心配だった。

絆は独りでは結べない。

彼には、それがよく解っていたからだ。

第四章 一角獣の角

仮住まいとしている建物は、外事四課の活動拠点として機能している。空き物件の多い通りの中だが、近くに工場がある為、あまり静かとは言えない。

旧産業区の片隅である。

仮居は、一階の半分を駐車場としていて二軒分のスペースがある。もう半分は工具類や任務で使う資材が保管されているメンテナンスルームとなっている。章やベネディクトの私室や、もう一人の同居人であるジェイク・マティアスの作業部屋（元は事務所だったらしく、オフィスらしい）が二階になる。特にこの作業部屋は高校を覗ける位置にあり、窓には望遠鏡が設置されていた。

大体の時間は、このオフィスで下らない話をして過ごす。ジェイクは望遠鏡の左に陣取って、デスクの上に置かれたパソコンを使って何かを調べている。章は部屋中央にある三人掛けソファに寝そべった。

「はー……疲れた」

ジェイクは赤い髪を後ろに流す形にバンダナで縛り、細い面と体格をしている。背は百八十センチあるというのだから章としては少し見上げる位だ。

彼はモニターから眼を離さずに声をかけてきた。

「おう、お疲れー。そのクーラーボックスにエクレアがあるから、食いたきゃ食っていいぞ」

いただきます、とソファの脇に置かれた青いクーラーボックスを開けて、目的のものを探し当てる。空腹だったので、何か腹に入れておきたい気分だった。

「ところで少年、お前、ハイスクールで術式使ったろう。学生に目撃されてたらしいじゃねえか。あの混乱でも人間てのは覚えてるもんだぜ。外事四課に来る時、術式の使用許可ライセンスが特別発行

されたとは言え、不用意過ぎる」

「すみません。でもあしななければ逃げ道を作れませんでした。始末書は後で書きますが、でもあの場合、外事四課としてはどうすれば良かったんでしょう」

「いや、消火器使えば良かったんじゃないの？」

「それが近くになかったんですよ。というか、^{エーテル}靈子放射光で構成された火には消化剤効きにくかったはずでは」

「じゃあ、緊急用梯子は」

「壊れていたそうで」

ジェイクは頭を抱えた。

「何てこった、日本のハイスクールはそこまで危機管理能力が低いのかよ。消防庁は何してんだ。定期点検とかしないの？ ま、俺なら飛び降りてるけどな」

「死にますけどね」

「マットかトランポリンみてえの下に用意してもらえばいいんだよ」それがあつた、と頭を抱えた。

しかしあの時それが実行出来ていたかと考えると、殆ど時間的余裕はなかった。浅月の力は、章より上だったのだ。あの数の部員を全員纏めて守りきるのは、極めて難しいと分析する。

「術式は確かに便利だが、自分の首も絞める諸刃の剣だ。あまり頼るなよ」

ジェイクは立ち上がると、話の途中で食べずにいた章のエクレアを奪い取った。

章は、四階から飛び降りれる学生というのも限られるだろう、と考えていたので、してやられた形になる。

「いったきー」

「あつ……もう。でも僕はあれで良かったと思います。間違つては、いなかったと思えます」

自分よりも誰かの命が大切だ、と。

ジェイクは、それに興味深そうに頷いた。

「ふーん。ま、いいんじゃないねえの。俺達は正義の味方って訳でもないけど、悪の秘密結社って訳でもない。やれる事をやるだけの、企業だからな」

「ドライですね」

「クールと言ってくれ」

「……言えますん」

「どっちだよ」

まあいいか、と。

ジェイクはデスクに戻ると、椅子に腰掛けた。

「今日の昼、サンダー用の追加弾薬が届いた。後で確認しといてくれ。」

それとアレ『ロングホーン』も来たぞ」

「W37A1でしたっけ。アメリカ製の50口径対物ライフル。幾らテロリスト用とは言っても大げさ過ぎるんじゃないですか？」

開け放している窓から、心地よい風が吹き込んでくる。

ジェイクは人差し指を振った。

「チツチツ。大げさじゃねーんだなこれが。市街地戦じゃ障害物が多過ぎるだろ。隠れる場所なんて幾らでもある。しかし、アンチマテリアル対物ライフルなら敵が隠れてる壁を貫いて狙撃出来る。アレ一挺でそのアドバンテージが逆転するのさ。ま、その分相手も警戒するが、そこはそれ、うまく立ち回ってもらうとして」

章はクーラーボックスからもう一つのエクレアを取り出した。無性に甘味が欲しくなったのである。横から取り上げられたせいだろう。

「ロングホーンは二挺だ。片方は別働隊、アンディの方に渡した。二メートルを超える全長だから、後で取り扱いのクセを覚えておけよ。メンテナンスルームに置いてある。ま、たぶんアンディが使うんだらうけど」

銃の扱いを章に教えたのはアンディである。それに限らず外事四課が使う銃器の整備や保管、弾薬管理は彼女が受け持っている。本

人はあまり現場に出ないが、狙撃手としての役割を与えられているらしい。

そんな話をしていると、章の後ろにあるドアが開いた。入ってきたのはベネディクトと、一人の女性である。

ベネディクトお付きの給仕係だ。彼女と同年代で、子供の頃からの付き合いらしい。しかし今の時間、ベネディクトは休んでいるはずだ。深夜の尾行劇に同行していたというのだから、眠っていて当然。

しかし眠気を一切感じさせない顔つきで、章の隣に座ると。

「手」

「はい？」

「手を出しなさい。テーピング交換するから」

「あ、はい。お願いします」

半分以上が焼け焦げたそれを、無遠慮に剥ぎ取る。一切の躊躇もない。皮膚が引つ張られる感触に思わず悲鳴が漏れた。

「いだだだだ！」

「容赦ねえー！ ハハハッ」

彼女は面倒見はいいのだが、あまり優しくはしてくれないようである。

そしてテーピングを巻く前に給仕係が持っていた濡れタオルを受け取ると、汚れをふき取ってからコールドスプレーで冷やす。

テーピングを巻き始める。

そこからは特に何も起こらないので章としてはつまらなかった。

「先輩、眠くないんですか？」

「どうして」

「いや、武田さんと組んで行動していたって聞いたものですから。今の時間は眠ってるかなとばかり」

「そうねえ……殆どキサラが動いてくれたから疲れはないし、まだ楽」

ベネディクトは興味なさげに言って。

「……臭い」

彼女は眼を細めて章を睨む。眉根を寄せて、不快さを隠そうともしない。

「新人。貴方、臭うわね」

「そんな顔でそんなふうに言われると流石に堪えるものがありますね」

さも数日お風呂に入っていないと言われた感覚に、若干落ち込んだのは無理もない話である。服の臭いを嗅いでみると、火事場特有の様々なものが焼け焦げた独特の香りが染み付いているのが解った。

これでは言われてもしまうのも納得だ、と頷き。

「解りました、シャワー浴びてきます」

「そう」

「あ、テーピングありがとうございます」

「別にいいわ、礼なんて」

濡れたらまた交換してあげる、と。

先程からジエイクは笑いを堪えている。それを見て、努めて平静に彼女が言った。

「新人君、火事の現場から二十三名の学生を救助したんですってね」

「おや、リアナちゃんから聞いたのかい」

給仕係が静々と頭を下げた。彼女の名前がリアナというのだ。ベネディクトが休んでいる間のめばしい情報は全て彼女を経由し、起きた時に伝えられる。

「ええ、部下の情報には常に眼を通しておきたいから」

「はあん。でもテーピングの交換くらいは、自分でやらせてもいいんじゃないねえの」

面倒を見過ぎだ、と続ける。

「あの子、不器用だから。学院でも劣等生だったみたいだし。まだ卒業もしないうちに外事四課へ配属なんて、まあそれは仮契約で期間限定だけれど——いきなり知らない場所に放り出されて、知らない人達に囲まれて、それで言い付けられるのが命のやり取りなんて、

かわいそうを通り越して悲惨でさえあるわよ」

まあ術式使いが常識のある日常を送るなんて有り得ないけれど――
――そう付け加える。

「ああ、それは解るが。しかし冷血で知られるお前があそこまで世話焼くのは、珍しいと思つてな」

給仕係のリアナが紅茶を淹れた白磁器をベネディクトの前に差し出した。テーブルで、かちやと音を立てる。彼女はそれを手に取ると、まず香りを楽しむ。

湯気をくゆらせる紅茶は、ジェイクのところにもその香りを届かせた。

「ふう……落ち着くわ」

「……………」

「ところでロングホーンの話だけれど」

「話がぶつ飛び過ぎてやしないかい？」

「ロングホーンの話に戻るけれど」

「戻るも何も、そんな話はなかったんだが」

どうやら追求されるのを避けているようだ、というのは彼にも解つた。

そこでリアナが口を挟む。

「ジェイク様」

無表情で感情《空気》の読めないメイド、というのが彼の中のイメージだ。

メイドと言ってもエプロンドレスなどは着用しておらず、普通の洋服を着ている。淡いオレンジのタートルネックとタイトスカートに、髪は軽くウェーブがかった金髪を頭頂部から少し横あたりで結ぶ、サイドテールという容姿である。

「メンテナンスルームにあったガンケース。

あの大きさから中身は狙撃銃だと思われませんが。情報通りであればW37A1のはずです。事実、そう表記されてありました。

ですがあれば、オリジナルのW37A1『ロングホーン』ではあ

りませんね?」

ジェイクは戸惑った。情報と違う、と言われて驚かないオペレーターはいない。

リアナが平坦に、抑揚のない調子で続ける。

「若干ながら攻的意図性を持った内包概念ガイストの感触がありました。しかし魔導器とは理論構築の体系が異なります。私の知る限りわたくし、恐らくは――」

その先の言葉を引き継ぐ、ベネディクト。

「術式兵装アームズ。あの学院長、もしかしたら……いえ、本当の狙いはこちだっただけでしょう。やってくれるわ。魔導器のテストに成功したら、今度はでかい長物を送り付けてくるなんて。もしかすると、この為に彼を外事四課へ送ってきたのかも知れないわね。」

あれは、サンダラーと同じ理論構築技術よ」

ジェイクは、内心の驚きを隠しつつ、震える指先でベネディクトを指した。

「おい、キリサキ。術式兵装って言ったよな、今。それって『学院』を主席で卒業した奴にのみ与えられる、コード持ちの特権のほじやないのか。」

だとしたら、あのロングホーン……じゃない何かは、お前の為に送られてきたって事になると思うが」

そうでなければ、普通は説明がつかないのだ。

特例が許されている外事四課だが、特例が許される個人というのは、コードという栄誉ある称号を与えられたエリートでなければ認められない。

「確かに私は学院を卒業する際、主席だったおかげでコードを与えられたわ。形式通りにね。けれど、その時は私に合う術式兵装がなかったの。そういう例は過去に何人も存在するわ。アレは魔導器と違い、人に合わせて製造されるものじゃないから、それは特に珍しいことでもない。ただ、後から適性が見合つと判明して送られてくる事はあるけれど」

けれど、間違いなく自分に宛てられたものではない、と続けて。
「じゃあ、あれもやっぱりサンダーと同じで、あの少年にしか撃てないのか」

「恐らくは……あの子、化けるかも知れないわよ。あの眼の事もあるしね」

「キリサキ。お前、だから少年の世話を焼いてるのか？」

恐る恐るといった様子で尋ねてくるジェイクを無視し、再びティーカップを持ち上げ、口に運ぶ。

彼としては、滅多に部下を喜ばない（今までは配属されてもリアナに押し付けていた）ベネディクトが章に構うのも、そう考えれば納得がいくのだ。

「コバルトブルーのウィザード・アイの霊障眼よ。そんな宝石みたいに綺麗なものに、惹かれない女はいないでしょ」

鋭いが、妖しさを感じさせる流し目を送り、ベネディクトはそう会話を終わらせた。

* * *

規則的に街路灯が並ぶ、夜の街は眩しい程の電光彩色で彩られていた。過剰とも言える装飾を施された看板で道行く人にアピールするゲームセンターに、ひっそりと佇む喫茶店や中華料理店を一瞥もせず、フードを目深に被った少年は歩く。

様々な店が軒を連ねる、少年の左側を仕事帰りの会社員が通り過ぎる。視線を向ければ数え切れない人が過ぎ去っていく様を見る事が出来たろう。

しかし少年は俯きがちに、自分の行く先五メートルあたりを見るようにして歩いていた。

彼の右側は植え込みやガードレールのある道路脇で、その向こうを自動車の群れがやかましく走っていく。時折、クラクションが耳に届いた。

少年——吉田義男という名前で学校に通っている少年は、ふと立ち止まる。首を少し捻り、左側を向いた。

「尾けられてるな」

肩越しに後ろを向こうとして、途中で止めた為の動作だ。前に向き直って歩き出す。

「面倒臭え……貧乏クジ引かされた挙句に今度は外事四課の特別対策室かよ。」

アイツら殆ど『エクストラ』だしなあ。仕込み期間の今はまだ見づかりたくなつたが、仕方ないか」

独り言を呟くフードの少年は、シャッターの閉まっている商店の前を通り過ぎようとした時、突然走り出して商店のシャッター脇に見える細道へと飛び込んだ。

そのまま暗がりへと姿を消す。恐らく背後では——特に自分を尾行していた人物は焦っているだろう、と予測する。

捨てられていたゴミの塊を蹴飛ばし、寝ているホームレスを跨ぐというよりは飛び越えて、コンクリートブロックを積み上げて作られた塀を乗り越える。

民家の庭先を踏み荒らして進むと、裏通りに出た。人通りが少なく、明かりも殆どない。左手で黒いパーカーについた汚れを払いつつ、逆の手をフードに隠した耳にあてる。そこに仕込まれた通信機器のスイッチを入れたのだ。

「こちらクロウ、敵に尾けられた。現在逃走中。現在地は裏通り付近。回収を頼む」

すぐに返答があつた。ノイズ混じりのそれは、太い男の声である。『ストークよりクロウ、そっちにアウルを向かわせる。リカバリーポイントは市立図書館前道路、到着予定は五分後』

頭の中に街の地図を呼び出し（予め暗記していた）目的地への最短距離を割り出して、再び駆け出す。さっきまでいた大通りから更に離れる道順だ。

「クロウ了解、置いていかないでくれよ」

『アウルよりクロウ、任せておけ。お前に賭けで勝った分の金を貰うまでは、捕まってもらっちゃ困るからな』

軽い調子のやりとりで鼻で笑いつつ、近道をしようとフェンスを乗り越え、公園に入っていく。植え込みがざざと鳴り、緑葉が服に付いたが、気にしている暇はない。

噴水のある広場に出る。比較的照明の多い場所だ。外出禁止令に定められた時間帯までまだ一時間ほど余裕はあるが、裏通りの辺りからここに来るまで、既に人通りはなかった。

当然、吉田義男はここも無人だと思っていた。通過点とするだけで、もし人がいても特に問題はないと思っていた。

しかし。刃渡り二十センチ程のコンバット・ナイフを握った人物がいては、彼も足を止めざるを得なかった。

背が低い。小柄な少女である。あどけない顔つきに未成熟な体型は、十三歳という外見年齢には適切な発育途上だろう。ナイフを右の逆手に握る手は滑り止め用の黒い革手袋に包まれ、長袖の白い力ツターシャツは裾を出して、膝下までのハーフパンツを少し隠している形だ。

「誰だ……って、子供？」

短い赤ネクタイと、後頭部の高い位置で邪魔にならないようにと結んだ一条縛りが、風ですこし揺れる。黒髪、黒瞳の日本人だった。

少女は、外見相応の幼い声で返事を返す。

「抵抗せず、大人しく捕まって下さい」

事務的な口調で、眼に力がない。感情が、あまり感じられない。

無表情のまま、言葉を続ける。

「——お察しかと思いますが、こちらは外事四課の特別対策室です。あなたが『シャンバラの子供達』の工員である事は解っています。武器を捨て、頭の後ろで手を組みなさい」

右手のナイフを順手に持ち替え、突きつける。彼我の距離は目測およそ十メートルだ。

吉田は脱力して、肩を落とす。

「ガキじゃねえか。ウソだろ、俺らの敵がこんななんて……俺は小学生相手にあんな必死になったのかよ。うわあ、アホくせえ」

頭に手をやり、空を仰ぐ。少女——キサラはそれを見て、右手を下ろす。

「言っておきますが小学生ではありません」

「聞いてねーよ……それに、外事四課って事はお前も『エクストラ』なんだろ、俺は術式使いとか超能力者だとかが、死ぬ程嫌いなんだ。

近寄るな、化け物」

術式使いや超能力者を、特別な人間という意味で『エクストラ』

と呼ぶのは、大抵の場合がそれを疎む側である。

その場合は同じ単語でも『余分』という意味を込められる事が多い。

或いは端役——番外。^{エクストラ}人道から外れたモノとして、そう蔑まれる。

対して一般の人々をノーマルと呼ぶが、それは格下に見られるとして呼ばれる事を嫌う人間も多い。

吉田が口の端を上げ、嘲りの笑みを浮かべた。

「ほら、使ってみる。お得意の大道芸をよ。」

それとも手品って言ったほうがいいか、人外^{エクストラ}」

ナイフを持つキサラは、それに何の感情を表す事もなく、静かにゆっくりと歩み寄り。

途中、屈んで——バネ仕掛けのように飛び込んだ。

投げ倒そうと伸ばした左手は、しかし吉田が払いのけつつ、鳩尾^{みぞおち}

目掛けた右のアップパーを放ってくる。キサラ側ではそれも予測範囲内だった為、打ってきた腕の肘あたりを掴み、手前に引く。

吉田が体勢を崩す。踏み止まろうと足を伸ばしてくる。その隙に背後へ回り、自然に右腕も後ろへ持つていかれ、それは関節が極まるように収まった。右腕だけ『休め』の形にされたようなものだ。

キサラはナイフを吉田の首筋にあてようとするが、それは彼の左肘が、彼女の顔側面を殴る事で防がれた。距離を取られる。

吉田の左ミドルキックは、腕を立てて防御の姿勢を取ったかに見

えるキサラの、防御と同時に攻勢へと移れるよう、腕の下に隠されたナイフを見てとり、命中と同時に刺さると判断し、キックを途中で停止。

膝を基点にローキックへと変じ、それはキサラの膝側面へと当たった。痛みには体を落とした、その頭目掛けた打ち下ろしの右は、しかし。

視えない壁のようなもので、防がれた。衝撃が壁に伝わったのか、波紋のようなものが広がって、風景が歪む。

舌打ちが聞こえる。

「そんなもんかよ、化け物。もっと撃つてこいよ、その反則技をよ。CQCなんか使ってねえで、もっと本気で殺しに来いよ！」

その言葉が直接の引き金になったわけではないが、彼女に変化が訪れた。

戦闘行為の中でこそ、真価を発揮するタイプなのだ。

キサラの眼に、光が宿り始める。人形が意志ウィルを持ったかの如く、それは劇的な変化だった。

戦闘中毒コンバット・ハイ——攻撃的精神病質者である彼女は、戦う事で快感を得、昂揚感を感じる、極めて不安定な人格の持ち主だ。本来は銃撃戦で起こる現象だが、彼女の場合はその限りではない。

「ハア——」

長く息を吐き出し、右に体を開くと、ナイフを後ろに引いて、力の溜めを作っている。左の掌を地面につけた、地を這うような低姿勢だ。

忍者の家系に生まれたからか、感情をむき出しにする事こそないが——明らかな『変質』を遂げた彼女に対し、吉田は疑問を抱いた（何だ、さっきまでと違うな、ちょっとヤバイ感じだ。暴力性を隠そうともしない。肉食獣の気配に似てる。

これじゃまるで『人外』そのものじゃねえか）

瞳を爛々と輝かせ、相手の喉を一撃で掻っ切る為にあからさまな攻撃姿勢を取る彼女は、しかし自ら望んでこうなったわけではない。

彼女自身、自分に振り回されているのだ。

凶暴な野性を抑え付けながら、口を開く。

さっきの攻防で、吉田がパーカーの下に仕込んでいる物を見抜いたのである。

アンチグノーシスプロテクター

「対霊的作用防具ですか。良い物を持っていますね。

遠慮無く、やれそうです」

キサラが右の逆手に持つナイフが、その刀身を『伸ばす』

正確には、術式によってナイフという媒体が持つ性質を強化した形だ。白い光がナイフに集まり、刀身が伸長した形態で固定したのが、伸びたと見える原因である。

それは一本の剣になった。片刃の剣には反りがなく、例えるなら刀――鰐の無い忍者刀に似ている。

術式使用時に必ず生じるとされる紋章は、右の拳骨延長線上に、少し離れて浮かび上がった。

大きく踏み込み、照明灯より眩しく辺りを照らす片刃剣を、左に薙ぎ払う。尾を引く霊子反射光によってその軌跡がよく解る。

吉田はタイミングを合わせて後ろに跳び、茂みの中に姿を隠した。片刃剣がパーカーを掠める。植え込みが一際騒ぐ。枝葉の動きから、身を潜めて離れていくのが解った。

（あの感じ、逃げた先に仲間がいるのか。装備からして対術式使用の武器を揃えていてもおかしくない。単独での深追いは、厳禁）

タクティカルアドバンテージ

幾ら術式使いが戦闘面において常人より戦術的優位性が高いと言っても、根本が一人の人間である事には変わらない。処理能力を超える飽和攻撃に晒されれば敗北は必至だ。

キサラは数度、深呼吸をする。戦う事で快感と昂揚を得た事に自責の念が湧く。どうしてもそれらから逃げる事が出来ない精神は、ゴースト何かに取り憑かれているようにさえ感じてしまう。

或いは、囚われている。

過去の事件が、未だに彼女の心を縛り付けているのか。

追いかける事もせず、地面にへたり込んでいると、遠くで車が走

つていく音がした。耳に仕込んだ通信機が受信を告げる。

「こちらポインター」

『バックスよりポインター、状況は？』

「戦闘に及びましたが、逃げられました。すみません」

通信相手の武田は安堵の溜息を吐く。

『無事ならいい。一人で先行した時はどうなるかと思ったがな。狙撃ポイントにいるアンディにも知らせておくぞ。今から迎えに行くから、大人しくしてろよ』

了解の返事を返し、夜空を見上げて白い息を、ゆっくり吐いた。しばらくして公園の入り口に現れた、大柄な成人男性が武田だ。茶色のスーツを上下に纏い、噴水広場へと踏み入ってくる。

「大丈夫か、キサラ。一戦やらかしたんなら、疲れたろう。ほら、おぶってやる」

広い背中を向けて、屈む。親と子ほども年が離れている為、傍目にはそのようにしか見えないだろう。

キサラも抵抗せず、武田の背に体を預ける。

父親の背中を思い出して安心したせいか、そのまま眠りに落ちていった。

第五章 In My Heart

雨の音で目が覚めた。ワンボックスカーという座席の多い車は、それ程寝心地が良くはなかった。それでも外でアスファルトに寝転がるのとは天と地程も差があるだろう。コートの胸ポケットにいれてあった眼鏡を取り、かける。

右手首に巻いた腕時計を確認する。時計の長針は、寝る前から半周していた。

章は固まった体を伸ばし、少し腰を浮かせて座り直した。雨が車の屋根を叩く音に興味を惹かれると、窓から外の暗い景色を見た。

時刻は午前二時である。学校で火事が起きた事件の翌日に、章がこうして車中泊をしているのにはベネディクトの意志が絡んでいる。彼女は現場指揮を取る事になったのだ。

命令は強制査察。店の内部に踏み入り、直接証拠を暴き出すという力押しだ。無論、包囲網や警戒網の構築も手筈は整えられているだろう。しかし法律に縛られない超法規的行動と言うだけでは、関係各所に与える影響を無視する事は出来ない。

それを考えるのは上の仕事だ、と。ひとまずは頭の隅に置いておき、これから始まる事——自分がこれからやる事を考えると、どんなよりと気が滅入ってきた。

思わず溜息が漏れる。それに、後ろに座っていた一人が答えた。少女の声。

「秋田君。キミ、どうしてこの作戦を受けたの」

キサラ・タチカワという女子中学生にも見える幼い容姿をしたこの少女は、力のない眼をしている。これは常であり、彼女の特徴とも言えるものだ。章は彼女の言葉に耳を傾けた。

「もう学院に帰ったほうがいい。君には、ここは向いてない。練習では撃てても、実戦で撃てなければ意味なんてないの。君、まだ人を撃てないんでしょう?」

彼は肩を落とした。もう何度言われたか解らない、彼のそれは欠点であり、欠陥であり、弱点だった。

「解っています、甘いだけでは生きていけないって。自分が情けないって、痛感してますよ」

キサラは慰めを口にする事もなく、黙っている。

「先輩に言われました。僕みたいなのから真っ先に死んでいくって。待っているだけでは何も変わらないって。動かなければ何も変えられないって。でも、少なくとも、生き延びる手段が相手を殺す事だけだなんて、僕には、とても思えないんです。

何かもつと、他の手段が——」

聞いているだけだった少女は、顎を引いて静かに言葉を返した。

「お人好しね。それに優柔不断。でもそれが君の気持ち……混じり気のない意志なのね」

「意志……そうでしょうか。僕にはそれが、自分の意志で決めた事なのか、流されて決めさせられたのかの区別が付きません」

その自信が無い、と零し、少女から眼を逸らした。

「そうね、君は意志が弱い。僕に言ったそれも、何か形のあるモノじゃない。具体性なんて何もない。でも、君がそう感じた想いは、本物だと思う」

章は口の中で、本物という単語を繰り返す。キサラは何か大切な事を伝えようとしている。それが解るくらいには、自分も彼女を理解出来ているのだと実感する。

普段から人との間に壁を作っている少女だ。そうやって一線を引いているのは、やはり過去の事故というのが——章はその詳細を知らないが——関係しているのだろう。

「君は僕達とは違う。僕達とは違う可能性を持つてる。だから、僕達とは違う答えを見つけられるはずなんだ。確かに、アルカデルト主任の言葉も一理ある。戦わなければ自分が死ぬだけだから。でもそれは、それでも今は君に生き延びて欲しいからそう厳しく言うてる、んだと思う」

意味なく厳しいだけじゃないけど、心を隠す事に慣れてしまったのかも、と続け、そこでキサラは話を変えた。

「君の持つ魔導器——サンダラーは、元々西部劇に出てくるビリー・ザ・キッドが持っていたというライトニング41を原型にしたものよ。義賊と言われ、幾度も法律を犯して、しかし今でも人の間に残る存在——伝説のアウトロー。強きをくじき、弱きを助ける。誰かの為だとか正義の為だとかじゃない。自分の信念を貫いたんだ。」

彼はそうして自分の意志^{ウィル}に生きた人、だったんだって」

先日、アンディが問い掛けてきた時は疑問に思っただけであった
ビリー・ザ・キッドの名前を、その名前が持つ意味を、章はようやく少し、理解した。

何かしらお題目があれば人は自分の意志を、それに沿う形で妥協したり納得させる事が出来る。

それには『仕方がないから』という例が挙げられる。仕事だから仕方なく人を利用する。騙して搾取する。危なくなったら切り捨てる。そんなものだ。けれどそれを由とせず、自分の意志のみで生きる事が出来る人間はどれだけいるだろうか。

「間違っていると思うなら、正しいと思える答えを探してみたら。誰かに否定されても、間違ってしまったとしても『それでも』と言いつづけられるような。」

少なくともそうやって、自分が正しいと思える答えを」

その為にこそ、その力を使えばいい——彼女はそう締め括り、後頭部にある一条縛りに触れた。穏やかに眼を閉じる姿は何かを思い出しているようにも見える。

彼女の言葉は、到底十三歳とは思えない重みを持っていた。それが彼より長く戦いの場に身を置いてきた所為か、それとも彼女が章に抱いている期待の為かは、彼にはまだ解らなかった。

*

*

*

ベネディクトが車に戻り、細かい打ち合わせをする事になった。

ペンライトでA4サイズの地図を照らす。車内にいた全員が集まると、かなり狭苦しい。章は息が詰まりそうだった。距離がすぐ隣だからだろう、ベネディクトの纏う雨と香水の匂いが湿気と共に届いた。

「確認するわよ。まずAチームが店内に突入する。客がいるけど、最も重要なポイントは店員の動きよ。警報を鳴らされたらネズミが逃げるから、最初に落とす。監視カメラには外部からダミーの映像を流すわ。そっちはジェイクが担当する。その為の下準備は済ませである」

くすんだ茶色いスーツを着た男性が、大柄な体を縮こまらせながら手を上げた。角刈りがよく似合っている、と章の印象にある、武田という先輩だ。

「落とすっていうのは、殺すって事ですかい」

「それだと混乱が大きくなる。不必要な殺傷は私達に必要なじゃないわ。」

語弊があったわね。気絶させるなり組み伏せるなりして、とにかく行動出来ないようにして」

スーツの男性は頷き、すぐごと引き下がる。次にキサラが手を上げた。

「そうになると、連れてきて尋問出来ますね」

「まあ基本ね。でも常に姿を見せてる奴はあまり重要じゃない立場よ、そういう下っ端は何も知らない可能性が高い。そのあたりを考慮して任務の優先順位を間違えないで」

キサラは頷き、続きの言葉を待った。

「Aチームの突入と合わせてBチームが反対側の扉から入る。Aチームが階下に進み、調査をする間にCチームが続いてフォローに入り、Dチームは外を警戒。」

私達はAチームを担当するわ。他の班も同規模の人数ね。連携については手筈通りに」

妙齡の女性——胸元を大きく開いたスーツ姿のアンディが言った。ウェーブの長い金髪を後ろに払う。

「少ないわねえ。何時もだけど、今回の結構本格的よ？
術式使いだつて無敵じゃないんだし、大丈夫なの？」

ベネディクトは一度、呆れた溜息を吐いた。

「相手はノーマルばかりでしょ。手加減する余裕があるわ」
ヒュウ、と口笛が聞こえた。武田である。

「大きく出たね、主任」

「ああ、謙遜するのが日本人の美德だったかしら。でもそれで状況を見誤つても詰まらないわよね。事実を言つたつもりだったけれど、何か異論でも？」

「いや、別に。流石、番持ちは違つなつてね」

鋭く眼を細め、眉を寄せるベネディクトの様子に、章は焦った。

武田は彼女を内心嘲っているのだ。それが解らない彼女ではない。場が一気に緊迫する。

人間関係の不和——彼女が抱える、深刻な問題だ。思つた事を素直に言い過ぎる為だと章は理解しているし、その言葉が真つ直ぐ過ぎて周囲に誤解を与えるというのも解っている。

言葉を飾つて棘を隠す事も出来るだろうに、彼女はそれをしない。そうした無駄を嫌うのだ。必要最低限の内容を、最小限の言葉で伝えるクセがある。道具のように人を使う、人をロボットか何かと勘違いしている、という署内での彼女に対する評価——陰口とも言つ——はこういうところに起因する。

言われる側の心までは考えない。或いは自分なら言われても気にしないが、他人がどう取るかまで気付けない。章はそれを少し、寂しいと感じる。

だから、立場を忘れて口を挟んだ。勢い込んで咳払いを一つする。注目が集まった。

「地図を見る限り想定されるのは屋内戦ですし、狭い場所で出来るフォローというのも限られますね。この場合、正面からのぶつかり

合いが想定されて、術式使いにはもってこいの状況……という事になります。その逆をいかれるとまずいんじゃないでしょうか」

ベネディクトに限らず、他の三人も耳を疑った。

「術式使いは無敵じゃない——相手方もそれは十分解っているはずです。閃光音響手榴弾や催涙ガスという対処方はノーマル、エクストラ問わず効果があります。そういった方法で無力化を計る手立てをせずに、待ち受けている可能性は極めて低いかと」

ベネディクトが顎に手をあて、促した。

「それで」

「ですから、この場合、追いつくという意識ではなく誘い込まれるという気持ちでいったほうがいいのではないかな、と。

曲がりなりにも敵の隠れ家なわけですし。トラップの警戒は当然として、予め店内の無関係な人達を避難させてあげないといけませんね」

「敵がこちらの動きに気付いているとでも言いたげね」

「だって、その気になれば人質だって取れますよ、相手は。地の利は完全に向こうにあります。奇襲とは言え、対応が遅れるようなテロリストなら今まで生き残っていません。その中でも周囲の人達——何の関係もない人達を巻き込む可能性は、まず最初に排除すべきかと」

章の言葉を、彼女はにべもなく一蹴した。

「言っておくけれど、私は躊躇しないわよ。そんなの、人質にされる方が悪いじゃない。ソイツー人の為に数十人の犯人が逃げたら、元も子もないわ。私は撃つわよ。正義の味方ゴッソなんてするつもりない。

命のやり取りしてるのよ。そんな余裕あるものですか」

「待って下さい！ 外事四課は市民を守る為に戦ってるんじゃないんですか！？ 僕らはそういう役目を負ってるんじゃないんですか！？ それを放棄するんですか！？

無関係な人達は、僕達とは違います！ 何にも知らない人達なん

ですよ！ 助けるのが僕達の役割でしょう！」

「一般人一人を助けるのと、子供たちを攫う犯人を捕まえるのとでは、私は後者を取るわ。後々に被害が増える可能性を考慮すれば、そちらの方が優先されるべきでしょう」

「そりゃそっちの方が結果的に守れる人は多いのかも知れませんがどね、最大幸福数の為に最初から切り捨ててかかるなんて、切られた人たちからすれば堪ったもんじゃありませんよ！ 彼らだって人間です、心があるのに！」

「だったら、どうするの。具体案を提示しなさい」

章は言葉に詰まり、それは、の先を言う事が出来ない。無力で、無策で、無知な自分の身を呪わずにいられない。現実的な打開策を打ち出せない。元々そんなものがあれば、自分以外の誰かが言い出しているはずなのだ。それが解らない章ではなかった。

感情の迸りを、拳に込めて耐えた。

武田が言う。

「秋田。もうちょっと後先考えてから言おうぜ。そりゃ俺達だって出来る限りの事はするけどな。もちろん被害者は一人も出さないのが大前提だ。けれど、世の中そんなに簡単じゃない。犯人とそれに巻き込まれる被害者だってそうだ。

汚い人間と綺麗な人間だとか、誰も傷つけない理想論だとか、そんなのがまかり通る程解りやすく出来てないんだよ」

歯を食い縛り、考える。何か策はないか。一人でも多くの人を傷つけずに済む方法。尚且つ早急に問題を解決出来るような――

解っているのだ。そんなのが出来たら、それこそ『魔法』だ。現実にはそんなに甘くない。

周囲には魔法使いと揶揄される術式使いだが、その実は制限が多い。それとして第一に『モチーフ主題構造』というのが挙げられる。これは個人に科せられる術式の幅だ。そもその最初に霊子を感じ、知る事で新たな感覚質クオリアを構築し、その受容体を通して得られる感覚的経験により、個々人の体に最適化された形での霊子受容体マナ・レセプターが出来上が

る。

この霊子受容体が持つ、個人に最適化された形というのが『主題構造』であり、総じてこれに沿った形の術式構造の事を指す。

言わば個人の持つ『個性』である。特に精神面での影響が大きいと章が今まで学んだ中にはあった。日によって、若しくは時間によって調子が変わる為、霊子受容体と精神、霊子の関係は非常に流動的なものとされる。

この場で言うのなら、ベネディクトは壁の構築に適性を持ち、キサラは刃物の形成を得意とする。章に至っては不定形で、未だに明確な形態が判明していない。

ここで特筆すべきは、ベネディクトの応用性である。時にキサラの生成した霊子刃を超える障壁強度での近接武器や、銃弾に障壁を付与しての射出、更には広範囲を覆う結界の形成等、他の術式使いのお株を奪う程汎用性に富む。

これが、彼女が番持ち——最高位のコード・Sを戴く由来となっている。

だからこそ、彼女に寄せられる期待は大きなものになるし、それ故に孤立していく。また、その為に彼女の発言力は高い。

彼女が無理と断じたものは、無理なのだ、という暗黙の了解さえ生まれる程に。

唇を噛む章を見かねたように、言う。

「何とかしたい、と思っているのは解るけれど。限度というものがあるわよ」

「はい。理解している……つもりです」

「なら折り合いをつけなさい。外事四課にも、出来る事は限られているのだから」

術式は万能ではない。それは彼もよく解っていた。

せめて後悔だけはしないように、と思うのだ。

まだ人を撃つ覚悟は出来ていない。十七歳の身で人の命を奪う事に恐怖を感じるのは当然だ。けれどそれを許容しなければならぬ

今の立場は、否応なく決断を迫ってくる。

だから、彼は人を殺さないで済む解決方法を探している。その模索を諦めた時が、幼い心の死ぬ時である事を、胸の内でなんとなく感じている。

少年から大人へ変わる瞬間は、すぐそこまで迫ってきていた。

何かを変えたくても、誰かを守りたくても、不条理や不公平が付き纏う。そんな現実には溜息が漏れる。窓から見える町並みは、淀んだ冬の空気を纏い。

降り続ける雨に、曇り空は虹をかける事もない。
遠く、雷が聞こえてきた。

第六章 イグナイト・ブルー（上）

秋田章に割り振られたポジションは、後方待機だった。この作戦に参加する事を認められない、と現場指揮を勤める上司・ベネデクトに厳しく宣告された為だ。今は指揮通信車という車内面積の広い装甲車の中にいる。構造的には中型貨物自動車　トラック　に似た形状だ。

車輛後部に積み込まれた様々な通信機材に挟まれながら、窮屈そうにモニターと睨み合いながらパイプ椅子に座っている赤髪、長身の男はジェイク・マティアスだ。彼は外事四課の情報担当を任された優秀なメンバーの代表格である。薄暗い為、モニターからの光が彼の後ろ姿を浮かび上がらせている。そのまま投げかけられる言葉は、通信機材の出す機械音と交じり合いながら耳に届いてきた。

「キリサキに役立たずって言われたのがそんなにショックだったのか？」

思わず肩を落とすとパイプ椅子が軋んだ。

「それは割と言われ慣れてるので、そうでもないんですが。やっぱり、人を撃てなければ……撃たなければいけない仕事、なんですかね」

「他に何がある。術式使いは術式を使うだけでなく、銃を撃つ職業でもある。つまり人殺しだ。学院　で習わなかったか？」

「習いましたけど。けれど、銃を撃つから人殺し、と決めつけるのはどうなのでしょう。警官だって銃を撃ちます。けれど必ず人を殺してる訳じゃない」

威嚇射撃もしないという日本の警官を頭に浮かべてそんな事を言くと、ジェイクのキーボードを叩いていた指が止まる。

「甘ったれるな、新米」

低く静かな、けれど厳しい叱責に、身が強張る。ジェイクはこちらを見ない。明らかに憤っているのが見てとれた。

「日本はテロの心配がないからな。そう思つのも自然なんだろう。けれどアメリカ育ちの俺は知ってる。テロなんてどこにでもある。日常チャハンジだ。毎日が危険と隣り合わせだ。油断してる奴は力モでしかない。そんな価値観が横行する街と、日陰では銃器を平然と取引する死の商人達……麻薬、テロ、密売、殺人……俺はそういうものを見てきたし、知っている」

だからここに身を寄せた、と。

「殺さなければ殺される。弱い奴から死んでいく。それは何も間違っちゃいない、弱肉強食つてえ自然の摂理だ。それを捻じ曲げようとする奴は、理に反した異端者でさえある」

ジェイクは、章を見た。ぞつとする程、冷たい眼だ。

彼の過去に何があつたのか。何を見て、何を感じてきたのか、それは自分には解らない。けれど逆に何を知ればこんなに冷たい瞳が出来るのか、知りたくなつた。

「警官だつて銃を撃つ。撃たなければ殺されるからだ。人を守る為には、まず最初に自分を守らなくちゃいけないからな。海の向こうでは、警官だつて人を殺す。逆も然りだ。自分が生きる為に殺す。いいか、それは何も間違つちゃいない。」

お前は、それを否定するのか？　だとしたらとんでもない甘つたれだ。撃たずに人を守る、なんてのが通じる世の中なら、戦争なんてとつくになくなつてる」

「ジェイクさん。貴方、一体何があつたんですか」

顔を青くしている章を見て気が済んだのか、モニターへと向き直る。再びキーボードを叩く音がしてきた。

彼の過去にあつた出来事、静かに続けられるその言葉を章は聞く。「俺の家族は、全員テロで死んだ」

自爆テロ、だったと言う。ソファアの影に隠れていた自分が撃てれば家族は助かっていたと言う。とある宗教に狂つた数人に襲撃され、両親は眼の前で殺され、残つた家族から家の床下に自分だけ逃

がされて、生き延びたと。

背が小さいから。まだ子供だから。私達もきつと後から行くから。そんな言葉を最後に、眼の前で床板が嵌められる。兄と姉は抵抗虚しく殺された。あの時自分に力があれば。銃を撃てるだけの体があれば、きつと助けられたと彼は語る。

「テロリストは周到だ。俺の父が密かにテロ撲滅運動に参加していたのを嗅ぎつけ、家族諸共消し去った。奴らの情報網はどこに敷かれてるか解らない。俺達の知らないところで奴らは今も勢力を拡げている。それを知った時に、俺はこの道を選んだんだ」

最初はハッカーだったんだ、と続ける彼の眼は、以前の穏やかなものに戻っている。章からそれを見る事は出来ないが、声音の調子でそれとなく感じてはいる。

「特脳研にスカウトされてな。いや、ウェンズデイって言った方が通りが良いか？」

章は、一つ気になった単語があつたので質問した。ともすれば彼の怒りの琴線に触れる可能性があつたが、どうしても知りたくなつたのだ。

「テロ撲滅運動って言いましたよね。もしかして、グノーシス反対派、だったんでしょうか？」

「ああ、親はな。テロを起こしたのが推進派の連中だったのは言わなくても解るだろう。その背後にいるのはグノーシス主義団体のセント教団。指導者はシモン・マグナスってのもな。」

知っていると思うが、コイツらは現代のキリスト教グノーシス主義からは完全に分離した集団だ。同じなのは名前だけ。反宇宙的二元論なんてまるきり信じちゃいない。

コイツらは人の新たな可能性として、霊知資質 クオリア を掲げているのさ」

「霊知資質というと、術式使いが持つっていう、霊知因子 グノーシス・ファクター の事ですよね。別称、みたいな」

「ああ。それが世界を照らす新たな光、なんだとよ。くだらねえ妄

言だな」

唾でも吐きそうに言葉を吐き出すジェイクは、そろそろ話を切り上げようとまじめに入った。

「そしてソイツを人為的に作り出す薬なんてのが出てきちゃった。間違いなく奴らもこの件に絡んでる。虎頭 との関係は不明だが、必ず尻尾を掴まえてやる」

虎だけに、という冗談を言える程に和やかな空気ではないので、章は自重した。

彼の背負っているものを垣間見た事により、自分との違いに打ちのめされる。まだ章はそこまで重いものを背負っていない。研修先としてここへ派遣されてきた。その程度の認識だ。けれどこの研修を無事に終える事が出来れば、落ち零れとしての 学院 での落ち度を取り戻せる。そういうウマい話が彼に転がり込んだきたのは、単に学院長のお気に入りだから、という裏の事情もあった。

けれど人を殺してまで、果たしてこの先一生罪の意識に苛まれてまで、学院での成績に拘るべきなのか。

そんなはずはない、と頭を振る。そんな独善的に生きていける程、彼は自分が好きではないし、我が身が可愛くもない。確かに学院を無事に卒業出来れば、各国での重要なポストを担う人物の専属護衛等、華々しいポジションを得られる保証がある。それを足がかりに自分の人脈や活動拠点など足元を作っていく事だって難しくはないけれど、そんな輝かしい未来が何だというのだろう。一握りの身勝手な人間達のせいで強制的に 能力 に目覚めさせられた女子がいる。その友達は今も病院でじっと目覚めを待っているという。そんな理不尽な悲しみを放って、何が華々しい未来か。成績か。研修か。

そんなお題目に振り回される事など、あつてはならない。もっとよく考えて、見極めなければいけないのだ。自分の敵とは何なのか。自分は何をすべきなのか。

自分は、何の為にここにいいのか――

そうして、章は少しずつ理解していく。術式使用と、その敵について。どちらも人間なのに、どちらも解り合おうとしない。歩み寄れない、絶対的な断絶が、両者を分けているのだと。その断絶の理由を知るまでは、退くわけにはいかない、と。

まだ、雨は止まない。最後に、あ、そうそうと言いついて残っていた事を告げた。

「さっきの、日常チャハンジじゃなくて日常茶飯事です。サハンジ」

ジェイクの苦い表情を眼の端に留め、車載モニターへと視線を移した。

* * *

一気呵成、扉を蹴破ったベネディクトは素早く拳銃を構え、店内全てに響く声で言った。

「全員動くな！ 警察だ！」

服装も装備もバラバラな数人を見て、最初は呆然と、次第に混乱していく店内客達に、拳銃をこれ見よがしに掲げる。

やはり一番眼を惹くのが、金髪金眼の映える赤ジャケットを来たベネディクトだろう。作戦任務だというのに普段通りのロングスライトである。

「ここは既に包囲されている。強制立ち入り調査の為、そのまま待機してもらおう。そして何より静粛に願う。これに逆らう者には公務執行妨害として法的なペナルティが与えられる為、その事を先に明言しておく」

彼女の目配せにキサラ、武田、アンディはバーカウンターを乗り越え、スタッフルームへと繋がる扉を開けて侵入。

直後、爆発が起きた。敵の仕掛けたトラップだ、とベネディクトはすぐに理解した。爆炎が薄暗い店内——時刻は深夜十時。店内の光量は眼に痛くないよう控えめだ——に生まれ、煌々と燃え盛りな

がら周囲に広がった。

悲鳴。怒号。非常用ベルが鳴り響く中、それら一切を黙らせるように、ベネディクトは左腕を一振りにした。

途端、ぱつと姿を消す赤々とした、していた炎の舌。まるで風が攫ったかのように、静寂な暗闇と、こびりついた煤が名残を主張する。

彼女は、無事なキサラの姿を確認して小さく息を吐く。

「流石ね。あれで防御が間に合うなんて、やっぱり反射神経だけは並外れてる」

キサラ・タチカワの反応速度は課内でもトップレベルだ。作戦開始時から集中力を引き上げていた為、扉の裏に設置されていたブービートラップの作動音を聞き取り、それが起動するたった一瞬の間に防御用の術式障壁——防御スクリーンを形成したのである。

課内でも切り込み役としてタイプポジション・ストライカーを戴く彼女に、奇襲やトラップの類はおよそ通用しない。

それを、彼女達が左耳に付けているカメラ付きマイクロフォンは指揮通信車のモニターへと送信し、現状を伝える。

映像を見ていた章は感嘆の溜息を漏らした。

「今の、何で間に合ったんですか？ いえ単純な疑問ですけど、普通ならあのタイミングで間に合いませんよ」

章の言葉はともすれば誤解を生む内容だったが、ジェイクは彼に腹芸は無理だなと人物観察の結果を持っていた為、特に気にせず告げた。

「普通ならな。アイツは防御スクリーンの形成速度に意識容量の大半を割いてるんだ。それと近接用のブレード、だな。アイツの術式は全て近接格闘用に特化調整されてる。特筆すべきはそのスピードで、人外との格闘だって軽くこなしやがる。計測された内の最速記録はゼロコンマ二秒。人間が体を動かす際、脳が筋肉に電気信号を送る速度と同じだ。あらゆる工程を省略して短縮して、もうこれ以上は物理的に不可能な領域になっちまってる。」

そして――」

銃の発砲音に再びモニターを見やると、キサラが覗き込んだスタッフ用通路の先で銃火が瞬いていた。章は、そのマズルフラッシュに疑問を抱く。

（発砲！？　こんな街中で、減音器も付けずに！？　人に聞かれたらどんな騒ぎが起きるか考えてないのか！？）

店内に縮こまっていた客が混乱を起こした。このままここにいては危険だ、と我先に群がった表出入り口に、何時の間に侵入したのか、大柄な男が立ちふさがっていた。

袴姿。盛り上がった筋肉が押し上げる長着からはただならぬ威容と貫禄を放ち、人を近寄らせない空気を纏っている。裏口は既にベネディクトが塞いでいる為、自然と人は男がいる方に群がったのだが、彼に退こうという気はないようだ。

寄らば斬る――ベネディクトは、その長身からこちらを見下ろす人物にそんな印象を受けた。鋭い眼光は、しかし奇妙な仮面の隙間から放たれている。

天狗。彼女はそれをそう認識した。赤い全体色に白い髪と髭を飾りつけられ、立派な鼻がそそり立っている。憤りが不満かを表した厳つい表情は柳眉を逆立て、より一層人を近づけさせずにいた。

巖のような男性。抜き身の刃物のような彼に、一刻も早くここから逃げたいと願う客の一人が食ってかかった。

「おいアンタ！　そこどいてくれよ！」

天狗の面の下、ハ――と深く、長い息がゆっくり、漏れた。

「発――」

天狗は右腕を持ち上げると、無造作に振り下ろす。

それは声を掛けてきた客に対する、拳骨だった。父親が子にするような。叱り付ける時のような。しかしその威力は桁外れだった。筋骨隆々の肉体もあるだろう。だがそれだけでは決して説明し切れない圧倒的な力で、客の男性は地面に打ち倒された。頭からは――

―眼の端や耳朶から血液が流れ出している。恐らく頭蓋骨の形も変形しているか、悪ければ陥没しているかも知れない。

何か、言い知れない恐怖のようなものが店内に漂い始めた時、天狗はベネディクトを見た。

既にキサラや武田、アンディの姿は無い。マイクロフォンの向こうで指揮通信車とやり取りをしながら、指示した目的通りに行動している。

無論、こちらの情報も流れているだろう。マイクロフォンの向こうからは指揮官の声がする。

『キーパーよりポインター。そのアンノウンはBC双方のチームを蹴散らしてくれたようだ。体一つで一人残らずな。ソイツは危険過ぎる、戦闘力も未知数だ。チームを連れて撤退しろ』

ポインターというのは課内特別対策室の特殊任務部隊に与えられるポジション、役割名だ。今回のこれは司令塔であるベネディクトを指す――冷静な声だが、十分に危機感を煽り立ててくる内容に、すぐさまここから逃げ出したいと思うのが普通だろう。

しかし彼女は、平静でありながら強固な意志　ウィル　で、退く事を拒んだ。とても冷静であるとは思えない行動に、通信機向こうの通信車は騒然とする。

『何をしているポインター、今どんな状況に置かれているか解らないのか？ そいつは今までお前達が戦ってきた奴とは違う。恐らく本物の　先天性戦闘好適種　だ』

ドミネーターという単語に、眉を顰めた。それはおよそ術式使いでもマトモに相手取るのは避けたい相手だ。

曰く、生まれながらにして戦闘のイロハを、誰に教わる事なく識っている。

曰く、常人よりも頑強な肉体と優れた動体視力、反応速度、新陳代謝、治癒能力を持ち、総合的に見て人類の中で最も優れた存在である。

曰く、肉体の耐久度、持久能力への好適性を持ち、三日三晩絶食

しても初日の好調を維持出来る。

曰く、学習能力に秀で、学問分野でも優れた才覚を発揮する。特に顕著なのが、

「身体操法。体を操る理論や技術に並外れた適性を発揮する、だったかしら。」

ねえ、ミスター・ロングノーズ？」

彼女がそう呼ぶと、天狗は笑った、ようだった。面の奥からくぐもった声が聞こえてくる。

「良い度胸だな、レッドジャケット。お前の噂は良く耳にしている。一度手合わせしたいと思っていたのだな。こんなところまで来てやったぞ」

キリサキは、肩までのセミロングをかき上げた。

「そう。でも私、ダンスの下手な男性は好みじゃないの。力任せなんてガツカリだわ。それと仮装パーティは余所でやって下さらない？ 公の場でレディに素顔も見せないなんて、失礼にも程があるでしょう」

皮肉たっぷりな挨拶に、天狗は女だてらに天晴れ、と賛辞を送った。

「礼を問われる場とは思っていなかったな。だがこれはどうしても必要なものでな。外す訳にはいかん。外にいるお前の仲間に、素顔を晒しては後々不利になるからな」

少なくともこの男は、外事四課の事を知っており、これと敵対する組織に属している可能性がある、と推論立てた。

マイクロフォンに小声で、素早く告げる。

「ポインターよりストライカー、中はどうなってるの？」

反応はすぐにあった。

『これ、ただの酒場じゃないですよ。施設——何かの施設があります。教会？ データ保存用のサーバールームとか、弾薬庫とか。今アンディが内のデータを指揮車に送ってます。』

キーパー、こちらストライカー。十歳程度と思われる少年と少女

を発見、保護しました。衰弱している様子。護送します』

その言葉が終わると間髪入れず、金属同士がぶつかり合う甲高い音がした。

「キサラ!？」

ポジヨン名を忘れてそう呼んでしまった事に眉根を寄せる。後で始末書は免れない。

スピーカーの向こうからは、微かに相手の声が聞こえた。少年のものようだ。

『よう、化物 エクストラ 共。ご機嫌麗しゅう——ナンテナ』

少年——吉田義男は、コンクリート壁で覆われた冷たく、狭い通路の中において、全くの常識外れな事に、日本刀を一振り所持していた。

指揮通信車内でその映像を見ていた章は、度肝を抜かれた気分だった。

「吉田君!？ どうしてここに、いや、そうおかしな事じゃないか。でも何で刀なんて、それもあんな狭い場所で」

その言葉に答えたのは、同じ車内にいた特別対策室室長、特殊任務部隊指揮官のデウドネ・シルベストリだ。冷血にして非道と言われ、いつも堂々としているベネディクトでさえ避ける男。

鷹のように鋭い眼は碧眼。髪は後ろに撫で付けたスタイルで睨みつけるようなきつい顔つきを隠そうともしない。

「腕に相当の自信があるのだろう。でなければあの場に長物など持ちださまい。」

それに——少しアイツについてジェイクに調べさせたが、つい今しがた面白い情報が入った。聞くか？」

自分の意見を聞くななんて珍しい。章はこの時、まだ呑気にもそんな事を考えていた。デウドネの眼が自分の様子を一つも逃さず観察している事に、まだ気付いていない。

「何でしょう?」

「奴の名前と、経歴。そして武装、靈的適性だ」

「それはどのようなものでしょう」

デュドネは、そこで一拍置く。眼光の鋭さが増した。

「アラガキ・アキト。一年前に術士養成機関 学院 から逃走した異分子だ。」

あの刀は十六夜驟雨 いざよい・しゅうつ。 四季刀 と言われ四つ存在する刀剣型術式兵装の一振り。四季刀については、お前の方が詳しいだろう?」

章は、震える唇で呟く。 何故か 彼の頭には、それについての詳しい情報が記憶されていた。

「――術式殺し」

「そう。そしてお前と同じコードネーム…… A A ダブルエー を持つ者だ」

第七章 イグナイト・ブルー（下）

意識を掻き回すような情報の波が去ると——実際それは一ミリ秒にも満たない時間だった——章はデュドネを見た。

何故記憶が混濁したのか。それは ダブルエー という言葉がどのような意味を持っているのか、知っている気がしたからだ。

「どうして、僕があの手を知っていると？ 彼が僕と同じとは、どういう事ですか？ 貴方は何を知っているんですか？」

質問は一つずつにしろ、とモニターに視線を落としたデュドネは、ジェイクにキリサキのフロアに入るよう、味方に通達しろと伝えた。

「お前がここに来た理由だ……それがサンダラーを使える理由だ。そして重火力型術式兵装 アーバレスト の適合者として選ばれた理由でもある。私は、あの方からお前を 使えるようにする役割を任された」

役割。指揮官を担う男が口にすると、それはとても重い言葉に聞こえた。義務や責任。そんな何かを背負っているように、章には思えたのだ。

黒いスーツを纏い、堂々と、迷いや淀みとは無縁のように部下へ指示を下していく様を、正直羨ましくも思っていた。

そんな心の強い——意志の強さを持ったデュドネは、真っ直ぐに章の眼を見る。

「ここが正念場だぞ、新入り。キサラが戦っている。キリサキも、武田も、姉さ……アンドレアもだ。無論俺もジェイクも、こうして戦っている。仲間が命を張っているんだ。

後はお前だけだ。事実を知りたければ戦え。何の苦労もなく真実に辿り着ける程世の中甘くはない。それに、お前の中に眠っている術式回路を駆使すれば、あのアンウンも退ける事が出来るだろう」「ちよ、ちよっと待って下さい。そんな無茶苦茶言われても、今の

僕には、人を撃つ事さえ出来ないんですよ」

「考えなくてもいい。どうせお前は 自動的 なんだ。ただ念じて、唱える。常識を造り変える魔法の言葉。」

フォーミュラ・トランスフォーム
公式変換とな。それが自分を目覚めさせる呪文なのだろう?」

「僕に……何が出来ると、いうんですか」

それは公式、つまり摂理を変換——改変するという意味を持つ、彼の術式の起動キーだ。彼が自分の演算領域に入り込んでいく許可証のようなもの。

人類の脳はおよそ七十パーセントが未使用の状態だと言われている。これをNIGHT HEADと呼称する説もある。

この未使用部分に、術式因子や特殊能力ギフトをこの世に現す為の原因が眠っているのだとされている。通常の学習能力には先天的な障害を持つていながら、ある特定の条件であれば常軌を逸した能力を発揮するというサヴァン症候群もこれが関与している。

これは知的障害や自閉性障害の人間が持つ症状であるが、その障害を抱える代わりに常人を遥かに凌駕するこの力を手に入れていると説明するならば、術式因子やギフト能力も、予め人間に眠っていた可能性の一つであると言える。

誰でも持つている力。けれどそれに気づき、行使出来る人間はほんの極少数に過ぎない。或いは様々な物と引き換えにしているかだ——オカルトや妄言に過ぎないようなこの話を、しかし現実に変えたのが術士養成機関の 学院 そしてそのシステムを構築した学院長 シルマール・オルブライト である。

ジェイクの声が緊急事態を告げる。画面にはベネディクトが映っていた。

「ポインターがアンノウンと戦闘を開始! コイツ、エーテル製のブレードを素手で受け止めやがった!」

「馬鹿な! 術式での攻撃は、同じ性質のものか霊的・物的に防御しなければ防げないはずだぞ!」

先輩、と口の中で呟く。致命的に相性が悪い。術式が通じないとなれば、幾らキリサキがオリジナル・セブン血族の才媛とは言え、ただの女性である。画面で見る天狗の大男は、今のキリサキから見れば鬼か何かの化物——人外にさえ映るだろう。

術式使いとは言え、元はただの人間。その答えに至った時、章は駆け出していった。

暴風を纏った拳が真っ直ぐ突き出されてくるのを、首を反らして——かろうじて回避した。前髪が数本持っていた事に、ベネディクトは舌を巻く。

呪術的な臭いを鼻に嗅ぐ。術式やギフトではない。彼女の知らない何かを、この天狗は身に纏っているようだった。

（掠ってさえないのに。直撃すれば、楽に死ねるわね）

自分の頭をトマトが潰れたような光景に置き換え、冗談じゃない、と心中吐き捨てる。

ざわつきに眼をやれば、店内にいた数人の客が我先にと扉に群がり、外に飛び出していく所だった。位置関係が変わった為だろう。天狗の妨害もないと判断、そのまま待つ。

ベネディクトが左手に持っている刃渡り二十センチ程のコンバットナイフはエーテル製近接ブレードと兼用である。これを触媒に刃物の特性を強化する事で、ゼロから術式を練るという工程を飛ばして、形成までの時間を大幅に短縮している。

そして右手の主兵装が、特殊任務部隊制式採用銃の自動拳銃USPカスタムである。銃口には長い筒状の減音器を^{サブレッサー}ねじ込んであり、銃口下部には赤外線を照射して狙いを精確にする^{レーザーエミティングモジュール}LSMが装着されたカスタムモデル。弾薬は暴徒鎮圧に優れる45ACPで、艶消しの黒い銃本体から吐き出されるハイパワーな弾頭は命中と同時に大の男を吹き飛ばす衝撃力を発揮する。

本来は大きな反動を伴うこのように強力な銃は両手で持つのが主

流だが、ベネディクトは逆手に持った左のナイフを敵に向けると、その手首に右下腕を乗せた。

銃とナイフを同時に使用出来る、CQCの構えだ。左手を添える事で反動を比較的抑えられる。敵の接近時には左手を前に伸ばす事で、先端がそのまま敵に突き刺さる合理性を持つ。

天狗が再び放ってくる正拳に、今度はナイフを避け際、滑らせるように当てる。相手の左下腕から血が噴き出すと、それは肘まで到達、返り血がベネディクトの金髪を左半分、赤く染めた。

天狗が低く呻く。ベネディクトは血塗れのまま、右手の拳銃を彼の脇腹に押し当てた。天狗が術式使いだったとしても防御スクリーンの機能しない零距离での三連射が狙いだ。

直前。

「死ね」

酷薄に言い捨て、射撃、すぐさま後ろにステップ、距離を取って頭に二発。

だが術式を纏わせたそれらの射撃も、天狗には通じない。弾丸はまるで鋼の壁にでもぶつかったかの如く、ひしゃげ、潰れて落下する。ナイフでつけた左腕の傷もたちどころに、煙をあげて、血小板の作用によるカサブタが出来る間もなく――再生した。

「再生能力？ それに……攻性術式を防ぐ防御力。再生能力は対エクストラ用の個人兵装ね。シャンバラの子供達 程度の組織では手に入れない技術だわ。だとしたら貴方は完全な第三勢力。それを持つているのは――実用化に成功しているのは。」

そう、確か、オリジナル・セブンの――」

答える義理はない、と向き直る天狗は、続きを言わせまいと一足飛びで距離を詰めてきた。記憶の底を探っていたベネディクトは、それを致命的な隙とし、まんまと正拳の一撃に直撃した。

刀剣戦闘での優秀な技能を認められ、キリサキと渾名される程、近接格闘にて数々の実績を収めてきた彼女だ。この時とて防御スクリーンの形成は間に合い、十分な強度を以ってその拳を迎えたのだ

が、さりとて肉体の強度は、普通の成人女性相当であった。

軍属であったという事もなく。特殊な訓練——は受けているが、筋力を伸ばすようなそれでもなく。ただ女性であるというだけで負うハンデを、全てオリジナル・セブン譲りのハイエンドな術式と頭の回転の早さで切り抜けてきた。

時に新たな術式の形態——今や術式目録インデックスにも載るようなエントリ―モデルを最初に発見、組み上げ、周囲に示す事で成功してきた事に、誇りさえ持っている。

だからこそその礼装だ。迷彩服を着たり軍用の防具をつけたりしては貴族として周囲に威光を示せない。人を導く立場の自分は、人に埋もれてはいけないのだ。

高貴なる義務ノブリス・オブリージュ。貴族は民衆を守り、導くものである。特権は、それを持たざる者への無私の行動を義務とし、それによって釣り合いが取られるべきであるという——古式ゆかしい慣わし。

だからこそ彼女は、孤児院や路上生活者などへの寄付、支援、救済にも時間を割き。慈善団体フィランソपीの活動にも可能な限り、意欲的に参加している。

自己を鍛えるのは、その合間の時間に過ぎなかったのだ。それを、彼女の誇りを、積み上げてきた優しい想いを——

天狗の右腕が、一撃の下、無情にも破壊した。

先輩、という言葉が響いた。

天狗が振り返る。子供か。そんな呟きが耳に届く。先にAチームが入ってきた扉から現れた章は、床に横たわるベネディクトを見て、眼を見開いた。

口から血を流している。呼吸はしているのだろうか。身動き一つしない。眼は髪に隠れて見えない。武器を取り落とした彼女は、まるで。

——致命的な ものを感じる——

章は天狗を見た。

予想していた、最悪の事態。通信車を飛び出す時に覚えた、悪い予感《bad omen》。

間に合わなかった悔しさがある。感情が脈打つのが解る。衝動が湧き上がってくるのを実感する。

それを吐き出す事に、躊躇いはなかった。

「何をした」

右手に握る銃——USPカスタムが、小刻みに震える。

強い怒りに、力み過ぎている。これではマトモに狙えない。しかし今それは問題ではない。

「先輩に何をした」

答える義理はない。天狗はそう言った。独り言のように呟く。

「全く。この程度では、外事四課も程度が知れるな。俺達の敵では

——」

震える銃口が、大柄な彼の額に向けられた。怒りに吊り上がった双眸が、蒼い光を湛えていく。

「何をしたって、聞いているんだよ！」

今なら、撃てる気がする。否、今だからこそ、撃てる。

先輩を独りぼっちのままにはしたくない。そんな寂しい思いをしてほしくない。もっと皆と触れ合ってほしい。きっと優しくて温かい想いが、そこにあるから——と。

そんな想いも、それを知ってほしいという自分の願いも、死んでしまったら、もう叶える事は出来ないのに。

「お前だけは」

意志^{ウィル}が、撃て、と言っている。

「ここで——倒す」

男は面白そうに鼻を鳴らした。

「そうか。なら来いよ、餓鬼。帰りついでに遊んでやる」

ごきごきと首を鳴らす余裕ぶった態度が、章の気持ち——それでも撃つのは、という最後の理性《一線》を断ち切った。

術式が通用しない事は事前に理解している。通常の射撃によって額を狙うが、傾げるだけで避けられる。恐らくはこちらの呼吸、指の動き、腕の力みでタイミングを読まれたのだ。そういう技術がある、と以前教わった事を思い出す。

相手が一息の間に距離を詰めてくる。反応が遅れ、構えていた銃を下から跳ね上げられた。直後に足を払われ、地面に倒れる。上から降ってくる雷のような拳骨を転がる事で回避した。天狗が鼻を鳴らす。

どうせ、銃がなければ何も出来ないんだろ。それに貧弱だ——そんな言葉を最後まで聞かず、銃が落ちた位置を確認すると、天狗の遙か後方。取りにいくには一策練る必要がある。

しかし術式は通用しない。それは解っている。だが 攪乱用のものならどうだろう。視覚や聴覚を妨害するようなものならば、効果を見込める可能性はないか。

章がこう考えた背後には、実際に閃光音響手榴弾スタングレネードという非殺傷の手投げ爆弾がある。これは約百万カンデラの光量とおよそ百七十、百八十デシベル——飛行機のエンジンで約百二十デシベル——という、爆発時付近の人間に一時的な失明、眩暈、難聴、耳鳴りなどの症状と、それらに伴うパニックや見当識失調を発生させて無力化することを目的とした非致死性兵器である。

ただし、これを術式によって模倣出来たとしても、使用者にも効果が及ぶ為、耳栓や対閃光ゴーグルといった装備が必要になる。

今、自分にそれはない。だが——

直感する。やらなければならない。それはこの今、必要な事だ。

術式の構築を、開始する。

「——公式変換」
フォーミュラ・トランスフォーム

瞳の輝きが増す。右手に術式の光——有り得ざる現象を引き起こし、常識を塗り替える魔法を、掴む。

天狗は油断している。自分に術式は通用しないという慢心からか。

ならば成功するのはこの一度のみ。可能な限り接近し、これを爆発させる事で効果を得る。

あの天狗を一時的にでも行動不能にする事が出来れば、恐らく先輩がやるうとしていた事を成す事が出来る。

章はそう考えた。

そして意志は囁く。^{ウィル}成すべきを成せ、と。

駆け出す。右手で殴りつけるように振りかぶる。素人丸出しのフォームに、天狗は面の下、嘲笑さえ浮かべた。避ける必要さえない。そんな慢心をも抱いて。

だが次の瞬間、常識は塗り替えられ、摂理は覆される。薄暗い店内を、天狗の眼前で弾けた光の爆弾が、青白く染め上げていく。眼を貫く光の波と、耳を潰す大爆音。二人、完全に行動不能となる。

恐らく天狗は術式使いとの戦闘経歴が浅かったのだろう。もしくは章をただの餓鬼と侮ってさえいなければ、こんな初歩的な策に引っ掛かりはしなかった。

全て自分の慢心が招いた敗北。天狗は臍を噛んだ。見誤ったか。そんな呟きに重なるように、聞こえない自分の声で、章は叫んだ。店内どこにいても聞こえるような大きさだ。

「今だ、武田さん！先輩を頼みます！」

バーカウンターの向こう、破壊された壁の後ろから飛び出してきた武田がベネディクトを担ぎ上げ、少年を一人抱えたアンディが章を促す。

ベネディクトがデュドネの指示に従わなかった理由はこれだ。味方の退路を確保するという目的を成し遂げようとしていたのだ。

あの時のデュドネは天狗というアンノウンの意識を、店外で待機している味方に向かせようとしたが——今でさえ何の動きもないという事は恐らく、そういう事なのだろう。

そしてキサラが、吉田義男——もとい、新垣彰人から逃れて、あちこち刀傷を負いながらも飛び出してきた。

だが、小脇に抱えた少女が、彼女の戦力を大幅に制限していた。

「エクストラにも情はあるのかい、化物のクセに。」

化物のクセに、人間のフリしてんじゃねえ！」

一体どのような技なのか、分厚く頑丈な造りのバーカウンターを一刀の下に断ち割り、寸秒前までそこにいたキサラを、ぞっとさせる。

そして、新垣彰人は、暗闇の中で強い光を放ち続ける二つのもの

——章の両眼を見た。

「おい——お前、九番か。^{ナイン}グラデーション・エアの^{エーテル・コンバーター}霊障眼なんて、持つてるのはお前とエクスキャリバーだけだもんな」

応えない章に、詰まらなさそうに溜息を吐いた。

「やっぱりさっきのはフラッシュバンか。折角の兄弟の再会だったのに、締まらねえな」

新垣彰人のそんな言葉を露知らず、何も見えず、聞こえない自閉の世界で、章はデュドネの 自動的 という言葉の意味を知る事となった。

勝手に組み上げられていく術式は、彼の体を変質させ、一つの目的を成そうと動き始める。

公式逆変換《フォーミュラ・リバース・トランスフォーメーション》

術式殺しを殺す為の術式兵装として。

彼の右手が、腰の後ろに差されていた一挺の拳銃を取り出した。

拳銃型術式兵装サンダラー。回転弾倉に六発、45カスール・ソーサラーが装填されている。そして、黒い銃身に蒼の幾何学紋様が走った。

「コアユニット起動」

口が勝手に動く。両手で構える。天狗はまだ回復しない。新垣彰人は、顔面を蒼白にしている。

「エクスキャリバーの銃だと!？」

そうか、奴と同じエーテル・コンバーターを持っているから……！」

「インテンションコネクティヴジェネレーター接続」

蒼の幾何学紋様は、黒い銃身をさあつと、銃口から変色させていく。そこから現れるのは、眩いばかりの銀の銃身。

「エーテルガン弾体への構成改変完了、エクステンション・カタパルト生成」

膝立ちのまま、両手で構える。空気が震えている。大規模な事象変移が起きようとしている前兆だ。キサラ達は耳鳴りが止まない。耳元で誰かが叫んでいる。

逃げる、と。

彼女は理解する。彼は、自分達とは全く違う何かだ。

ただの術式使いには、こんな事は出来ない。これだけ膨大な霊子放射光を用いるなど人間には不可能だと。

蒼の双眸はより一層輝きを増す。銃口から溢れる光が、側面の刻印を浮かばせた。

Where there is a will, there is a way (意志あるところに道はあり)

「グラウンドサスペンション展開」

エーテルガン ブルー・ライト 発射」

直後、視界が真っ青に染まった。

店内から飛び出した蒼い光条を見て、その女性は頷いた。周囲のものより背の高いビルの上、狙撃銃を片手に提げている。

「本当に使えるみたいね、エクスカリバーの銃。アクトの弟とはいえ、シルマールの息がかかってるなら、早めに処理しなくちゃね」
風に靡く紫のロングドレスが、彼女の妖しい印象を見る人に植え付ける。

彼女はダイヤモンド。店外にて待機していた外事四課のフォローを担当するチームは、彼女一人に全滅させられた。

不可視の弾丸。そのみの術式によって。

天を貫く御柱は、蒼く、透き通った空へと向かう。
雨を降らせる曇天を貫いて。

第八章 純血種

パソコンのモニターに今映っているのは、診察後の検査結果だ。右上に顔写真が載っている。特に感情の見えない無表情な、秋田章の顔だった。

今見られているデータは頭部のMRI検査後、彼の担当医となつた町立病院の柳原医師へと送られてきたばかりのもの。白衣の医師は無精髭の生える顎を撫でる。画面をスクロールして他のカルテ――ほぼ同時に来ていたレントゲン写真へと移ると、眼を細めた。

「やはり……妙なものが映っていると思ったら。この白い影、何なんだ？ 脳にびっしりとくっついていてるが。こんなのは見た事ないな……」

医師の理解を超えたそれは、章の頭部レントゲン画像、正面から見た画像に映っていた。右脳、左脳に相当数――数にしておよそ二十か三十程の、白く映る丸い影。直系は一センチ位になるだろう。不気味な光景だった。

これがどんな意味を持っているのか、柳原医師どこか院内の誰も知るはずはない。

医師のいるその部屋には、廊下とを隔てる扉が一つある。静々と、しかしノックもなしに入室してきたのは彼には見覚えのない女性。

「失礼します。警察の者です」

桜の代紋を戴く黒い手帳をおもむろに見せ、その女性、ベネディクトの給仕係を勤めるリアナは自慢のサイドテールを後ろに払った。医師は緊迫する。今まで警察が無断でここまで乗り込んできた前例はない。自分が何かしたか。そんな覚えのない心当たりはまだ考えが飛躍しても、おかしくはない。

「こちらに送られたデータの、うち一名に関する全ての情報を抹消させていただきます。彼に関与する全ては内務省直轄である外事四

課が預かり、また、これに関する事例には緘口令が敷かれます。違反した場合には社会的な制裁が加えられますので、ご了承下さい」

デスクから立ち上がったいた医師は、戸惑いながらも問い掛けた。

「お、横暴だ。幾ら警察でもカルテの内容にまで手を出す権限はないはずだぞ」

長い金髪のサイドテールが揺れる。

「それがあるのです。外事四課の特別対策室には、法を跨いでの超法規的行動が許されています。それは日本国の法律に縛られない、事後に証拠を求める攻性抑止行動が必要とされた為なのです。犯行が行われた後では対処しきれない事件、というのが往々にしてあるからですよ。そう、特に、常識では及びもつかない事、とか」

そこでリアナは、医師の背後に移るモニターのレントゲン画像を見た。

「そしてドクターにはやつてもらいたい事があります。彼のカルテを偽造し、一般患者のように見せかける事」

医師は、その申し出に憤りを露にした。

「私に、犯罪の片棒を担げと！？ 警察機構がそんな事を言うのか！ 世も末だな！」

静かに彼を見据えるリアナには、動揺の片鱗さえ見えない。この反応を予め予想していたのかも知れない。

「確かに法に触れますが、先に申し上げた通り、我々にはそうする義務と権利がある。それにこれは必要な事なのです。外事四課にはMRIやレントゲン撮影の機器がありませんからね。それに大抵の怪我であれば、時間はかかりますが治療促進用の――で事は済んでしまいます。先に医療設備のあるこちらに息をかけておかなかったこちらのミスですね。足がつく事を恐れたのがいけませんでした。彼らはこういった公共機関を襲う事を躊躇いませんし、人質を取られても困るので――」

気になるワードは幾つもあったが、とにかく目先の安全を確保しよう、と医師は考えた。相手は話し合いに応じる姿勢のようだし、

事を荒立てるようなそぶりもない。警察だからと変に構える必要などなかったのだ。肩の力を抜く。

「話が見えないのだが。要はMRIの設備やレントゲン撮影機材等を使えばいいというのか？ それなら正式な手続きを取れば、こちらとて」

言い終わる前に、リアナが強い口調で重ねた。

「それともう一つ。正直、これに関しては我々も手を上げています。ドクター柳原……貴方の経歴を調べさせていただきました。かつて脳医学を専攻し、秀才と呼ばれていたドクターだからこそ、これを頼みたいのです」

挫折した苦い経験が甦る。日本では自分がトップだと信じていたのに、アメリカの一流大学へ留学した事で人生が一変した思い出があった。

どうやっても適わない相手がいる。あがいてあがいて、血を吐く程努力しても、そんな努力を嘲笑うように一足飛びで先を行く天才が。

元々繊細だった彼の心は、度重なるストレスと過労でついに折れた。それまで無理をしていたツケがきたのだ。そうして海を渡り、帰ってきた今はしがない脳外科医。

それが七年前。

だがリアナの一言が、彼の思考を再び海の方こうへと渡らせる。

「貴方が適わなかったという天才——彼に、勝ってみませんか？」

医師は顔をあげる。何を言われたのか解らないという表情だったが、その思いはアメリカでの出来事に飛んでいたからかも知れない。リアナは更に続ける。

「それが、我々からの二つめの申し出です」

*

*

*

リアナが病室まで戻ると、窓が開いていた。日の光に透き通った

カーテンがゆらゆらと揺れる中、パソコンのキーボードを叩く音が聞こえてくる。

「お嬢様、起きておられたのですね。今はお体の具合もよろしいのですか？」

個室である為、ベッドは一脚である。それには頭に包帯を巻いたベネディクトが半身を起こして、備え付けの簡易テーブルでノートパソコンを開いていた。

「ええ、ドクターは何て？」

簡素な言葉に、頷く。

「こちらの申し出を受けるとの事です。最初は渋っていたのですが、彼の体の研究という知的欲求には勝てなかったようです」

「そう。やはりね。まあ昔のライバルが相手というのもあるのでしょうけれど。男ってそういうものなのかしらね」

パソコンの隣に置いてあった缶の紅茶を取ると、プルタブを開ける。それを見咎めたリアナが。

「お嬢様、缶のものは質が良くありません。私がない時は仕方ありませんが、せめてこういった場では私にお任せ下さい」

「いいわよ、面倒なもの。それよりそのライバル——シモン・マグナスだったわね」

にべもない反応に眉根を寄せかけたが、その名前に眼光は鋭さを増した。

「やはり、彼ですか。お嬢様と同じ、オリジナル・セブンの血統」

「数年前に追い出されてるけどね。今調べたけど、アメリカではテロ活動に参加してたみたい。これが原因じゃない？ 全く、七大血統の一人とは思えないわね。伝統も守らずに何をトチ狂ったのやら」
缶を傾けるベネディクトに渋い顔を向けつつ、リアナはベッド脇のパイプ椅子に腰掛けた。

「ですが、あの薬……colorを造ったのですよね。人の霊知資質を後天的に目覚めさせる効果を持った、麻薬を」

薄い病院着の上から羽織ったシヨールと、金系のような髪が風を

浴びて軽く揺れた。

「その才能だけは認めるわ。学院でさえ解明出来ていない人体の神秘に手をかけたのだから。私の生家、アルカデルトだってそこまで進んでない。でもあの人なら、どうかしらね」

キーボードを叩く音が、一時止む。視線はモニターを見たまま、記憶を探っていく。

「オルブライト家のシルマール……学院長の事だけど。正直あの人は底が知れないわ。何を考えているのか解らない。裏で何をしているかも。或いはあの腹黒学院長だったら、その麻薬について解明出来るかもね」

ノートパソコンの液晶モニターには、先日の ラ・ピュセル 店内で行われた戦闘記録の映像データが流れている。ベネディクトが付けていたマイクロフォンは天狗の攻撃により途中で故障した為、キサラが提出したものを眺めている。

リアナが口を開いた。

「裏といえば。彼の事もそうですね。あの双銃身のリボルバー拳銃が、魔導器よりも格上の術式兵装だったという事も驚きでした」

「私達を馬鹿にしてるわ、ウェンズデイにはちゃんと正確な情報を寄越すように言っておかないと。」

あれだけの内包概念^{ガイスト}を封じてるなんて、個人携行可能な兵器として異常だわ。間違いなく戦術級の術式兵装よ。私の H・V より情報改変能力が高い」

アルカデルト家の持つ術式理論構築技術は、オリジナル・セブンの中でも一、二を争う程高い。肩を並べられるのはオルブライト家だけであると言われる中、それに慢心して溺れないよう、彼女は家を出た。

結果として、自分は成長したと実感している。無論まだまだ努力しなければ生家の誇る最先端技術には届かないが、それでも学院から輩出された中では歴代でも五指に入る自信があった。

その自分が生み出した H・V というハイエンドモデルを、しかも

軽々と上回る武器の出現には驚愕せざるを得なかったものだ。

現在の外事四課が誇る最高の攻撃力としてH・Vは認定されている。戦術級兵器として定められており、その扱いには室長からの申請と課長以上の承認が必要とされている。

彼女は、ノートパソコンで章が撃った銃の解析を行っていたのだ。特に眼を付けたのが、彼の口が呟いた言葉である。

「この単語…… 声音と抑揚のなさ、更に靈障眼のステージ進行度から見ても、恐らく無意識ね。先に入力されていた行動を出力しているだけに見える。」

特にこれの靈的作用現象が著しいわね。グラウンドサスペンション……これって域内作用効果かしら、性質は放射光帯域指定型の反動抑制領域ってところか」

通常、個人が持つ主題構造により、その靈子放射光は個性のようなものを持つ。

術式作用時に発生する発光色、使い切られなかった事による靈子の不完全燃焼で出た廃棄粒子が出す雑音、そして振動数である。

このうち、章が行ったのは振動数に焦点を絞り、限定し、自分の術式が放つ周囲への余波を防ぐ——急激な解放により内側から弾けようとする靈子放射光を抑えないと、第五元素爆発が起きる。これは爆弾のように直接的な爆発力を持たないが、代わりに衝撃波の発生と靈子波空白が発生する——

これを予め領域内でカットするという、術式の中でも高難度な域内作用効果である。

局所型靈的作用現象よりも域内作用効果の方が現象発露まで時間がかかり、維持の負荷から取り扱いが難しいとされている。

術式使いの意識容量には限りがある。これが術式の使用を制限する最大の原因だ。ものにもよるが負荷の軽い局所場型なら、それなりの術式使いであれば連射が効く。

しかし使用によって精神の消耗が高まると、様々なネガティブ要素が現れてくる。最も顕著なのがブレインロック現象。名前や自宅

の電話番号等、脳の長期記憶に貯蔵されている 覚えていて当たり前 の事を忘れてしまう、脳の誤作動とも呼ばれるものだ。尤も全てではなく、記憶喪失になるような心配はない。長期記憶の一部が欠ける、という意味である。

しかし息をする事、歩く事、心臓の鼓動でさえも例外なく、忘れてしまう。

戦闘中にこれが起き、しかもそれが行動を著しく阻害するような物事を忘れてしまった場合、致命的な状況に陥るのは間違いない。

リアナが首を傾げた。

「お嬢様、霊障眼のステージ進行とは？ そもそも霊障眼とは何でしょうか」

「この眼には霊子放射光増幅器……エーテル・コンバーターとしての機能がある。これは術式を使う際に霊子と精神の化合を手助けして変換効率を向上させ、改変能力を引き上げる効果が確認されている。これは殆ど突然変異ね、あの天狗……ドミネーターと同じ、生まれ持った天性としか言いようがないわ。尤もまだ未解明だから、他にも何か違う機能があるのかも知れないけれど。」

そしてステージというのは、これが保有者の精神と深く結びついていく経過の事。初期を？として？まであるけれど、最も重度な第？段階では、精神活動がほぼ停止するらしいわ」

それだけ精神汚染が進むと、もう手のうちようがない、と続ける。リアナは自分の体を両手で抱いた。

「怖いですね。諸刃の剣ですか。章君は、今どのあたりまで？」

「まだ解らないわ。今までの前例からすると？に近いかしら。その解明の為にあのドクター柳原に協力を頼んだんだから、結果を待ちましょう。だけど、本当にあの子の事を考えるなら、これ以上戦わせるべきではないのかも——」

ステージの進行が進めば、命令だけを実行する人形になるという。そんなのは見たくない。操り人形、或いは機械のようでさえある。

果たしてそれを生きていると言えるのだろうか。

ベネディクトは自分に問う。

多少厳しく言っても、やはり学院に追いつ返すべきだったのではないか。

彼に可能性を感じ、手元に置いていたのはまずかったのではないか。キサラやアンデイも抱いたという期待を、信じるべきではなかったのではないか。

頭を振る。今更それが出来るはずはない。これ程の術式兵装を使える事で、彼に利用価値が生まれてしまったのだ。これを放っておくような甘い外事四課ではない。そもそも、戦わないで済む人生ではないのだ。術式使いというものは。

ここで帰したところで、いずれ必ず彼は戦う事になるだろう。ならばここに置いた方が色々と融通が効く。

そう言い訳しても、彼のまっすぐな眼を頭から追いやる事は出来なかった。

「あの子の、霊子と精神を化合する速度と効率に凄まじい。不完全燃焼による廃棄粒子の発生数が完全にゼロの値を示す、ある意味完璧な術式を造り上げられるなんて、聞いた事が——」

ドアが、無遠慮に開かれた。

言葉もなしに入ってきたのは一人の女性。黒いスーツ——下はスラックスだ——を着た、金髪金眼の、堂々としていて眼つきの鋭い彼女は、今ベッドにいるベネディクトとよく似ている。

「よう、生きてるか」

張りのある声はどこか男っぽさを漂わせる。しかし艶やかな金髪を頭の後ろで縛った姿は妖艶な美女である。顔の造形も芸術のように整っている。

「その様子じゃだいたいぶやられたみたいだな、ベル。まあ相手も相手だ、仕方ない」

ベネディクトは、その人物の登場に眼を見開いた。普段からは考えられないような頓狂な声をあげる。

「ベラ姉様！？ ど、どうしてここに、今はスイスのはずでは」
姉妹と言われればその顔の作りや眼、肌の色という共通するものが多いのに頷ける。

しかし妹——ベネディクトはここ数年来会っていなかった実の姉に、戸惑いを隠せないようだ。

「いや何、仕事の途中で気になる話を耳にしたからな。だがま、一歩遅かったようだ」

躊躇う事無くベネディクトの傍まで寄ると、ショールを奪い、ベツドに押し倒した。

腹部のあたりを触り、ダメージの程を伺う。

「ね、姉様、何を」

「やはり治療促進用の術式では回復しきれなかったか。これも当然だな、あのバーサーカーの一撃を受けたってんだから。しかしよくこの程度で済んだな、外事四課に入ったのも無駄じゃなかったと見える」

姉——ベランジェールの言葉にきつく眼を細める。

「姉様、私は外事四課に入った事を誇りに思っています。貴族は民衆を守り、導く者である。その教えは今も私の中に生きている。民衆の中に在って、民衆を理解して、民衆の為に生きる。ここであら、その生き方を貫けるから」

「ナマ言ってんじゃない、餓鬼のクセに。お前なんぞ俺やベリアスの足元にも及ばんだろ。それにこのザマで、誇りも何もなかるうが」
ベランジェールが腹部を軽く押すと、ベネディクトは苦痛に顔を歪めた。汗が吹き出る。

「昔から我慢強い子だったからな。恐らく医師の診察もマトモに受けてないんだろ。体に触れられるのが嫌いだからな。だが、そうも言っていられんぞ」

ベランジェールは体を起こし、彼女を見下ろした。

「お前にはあのバーサーカーを止めてもらう。そしてその背後にいるシモン・マグナスを殺せ。同じオリジナル・セブンとしての、こ

れは義務だ」

「……やはり、あの天狗の協力者は、マグナス家のシモン・マグナスですか」

「それだけじゃない。虎頭タイガーヘッドから 銃弾の魔女 ダiamondも来ている。一筋縄ではいかんぞ……まあ、奴に関してはリアナ、お前の方が詳しいだろう」

はい、と返すリアナは、普段の給仕係の顔ではない。顔には、はつきりとした一つの意志ウィルが見てとれた。

「撃ちます。私が、あの女を殺します」

かつての辛い記憶を思い出し、胸元を押さえる。

ベランジェールの言葉に引き出される、過去の痛みに耐えているのかも知れない。

「奴の使う不可視の弾丸は、十年前の理論ながら未だに現役のフラッグシップモデルだ。術式目録インデックスに登録されている中で最も有名だろう。あれの戦果は凄まじいからな。どこからともなく飛んでくる、見えない弾丸を防げる奴はいないさ。

ましてやダイヤモンドの特殊遠視能力を含めると、これがな」

リアナが応えた。

「カウンタースナイプ、若しくは一気に懷に飛び込んでの近接戦なら勝ち目があります」

「近接戦？ あのバーサーカーがいるぞ。それにカウンタースナイプと言ったって、専門の狙撃技術を会得しているのは外事四課に一人しかいないだろう。武器管理職の、何ていった？ ベル」

姉が呼ぶ自分の愛称がくすぐったいのか、居心地が悪そうにするベネディクト。

「アンディ。アンドレア・シルベストリです」

「ああソイツ。狙撃用に特化した術式使いなんだろう、リアナ、お前が出る幕があるのか？」

「ベランジェール様は、私の術式特性についてご存知でしたね」
言われて、はっと応えた。

「中距離以下での高密度砲火だったか？ 複数の銃火器を同時に操作する。そう、目録名は ファランクス」

頷いたリアナは、ベネディクトに対して頭を下げた。

「私がこのように扱いにくい術式適性でなければ、先日の戦闘でもお嬢様のお傍に控えていられたのですが」

「リアナ、その話はもう済んだでしょう。あれは本部からの正式な作戦行動だったの。厳密には外事四課所属でない貴女が参加する事は出来なかったわ」

ベランジェールが苛立った声をあげる。

「話が逸れてる。それでリアナ、まさかお前が弾幕を張ってダイアモンドの注意を惹くともいうのか？ あわよくば仕留める？ 現実的じゃないな。もっとよく考えてから行動しろ。それがお前への忠告だ。感情に任せて先走るな。」

それとベル。俺はもう帰るが、さっき言った事を忘れるなよ。

シモン・マグナスを殺せ。手段の是非は問わん。

七大血統の長老、元老院からのお達しだぞ」

重苦しい空気に、解りました、と神妙な返事をする。

立ち去ろうと踵を返したベランジェールの背中に、続けた。

「姉様はどうするのです？ スイスに戻られるのですか」

「俺は俺の役割を果たす——ああ、そうだ。コイツを渡しておく」

そう言つてスーツの懷から取り出したのは、無骨な鉄の塊。

オートマチック
「自動拳銃ですか」

「45口径の神話を知ってるか？ 一八〇〇年末から一九一一年ごろまで行われたフィリピン、ミンダナオ島のモロ族との戦闘で話だ。」

植民地支配に抵抗するモロ族と戦うアメリカ軍は、銃を恐れないモロ族のゲリラ的戦術によって苦戦を強いられた。ジャングルから突然飛び出してくるモロ族への対処はライフルよりも拳銃で応戦する事が多くなった。動き回る近接戦では狙いのつけやすい拳銃の方が優れているからな。

しかし、予め麻薬を使ってトランス状態に陥り、苦痛や恐怖を感じなくなった彼らに当時の三八口径リボルバーを全弾撃ち込んでも倒す事は出来なかった。

これによりアメリカ軍は思いもよらないピンチに陥る。撃つても死なないから剣や槍によつて殺されてしまうケースが多発してな。

そこで当時生まれた45口径モデル、コルトガバメントM1911が光を浴びた。衝撃力のある強力な45口径弾薬はモロ族から彼らを守つたのだ。

他にもコルトSAAなど有名な銃は挙げるに暇がないが、制御しやすいオートマチックのコルトガバメントの方が、女には向いているさ。多少、反動は強いがな」

ベランジェールは、その拳銃を妹に渡した。

「姉様の、銃……」

「これはその血統を受け継ぐ純血種、コルトガバメントM1911A1だ。由緒正しい拳銃だ、アメリカ軍では現代まで制式採用され続け、既に神格化されていると言ってもいい。俺達が使うには、こういうのが相応しいだろう。」

この銃が、きっとお前を守ってくれる」

そこでベネディクトは、顔をあげる。

「姉様。今日は久しぶりに会ったからでしょうか。以前より饒舌ですな」

そっぽを向いた彼女は、そのまま体を返して扉に向かった。

「——怪我は治してやった。もう動けるだろう、じゃあな」

一度も振り返る事なく出て行つた彼女に、ベネディクトは苦笑を漏らす。

「あの人ったら。相変わらず不器用なんだから」

「それはお嬢様もよく似ておいでです」

「何ですって」

そう言つて腹部を触ると、さっきまであつた痛みが綺麗になくなっている。

ベランジェールは、彼女達がそうと気付かない、体に触れている僅かな時間のうちにベネディクトの怪我を治していた事になる。その事実思わず溜息を吐く。彼女にとっては何でも出来る、頼れる姉なのだ。いつまで経っても、適わないと思い知る。

やがてしばらくすると、個室の扉がノックされた。

「どうも、秋田ですけどー」

リアナが驚いて立ち上がり、彼を迎え入れる。二人が真つ先に確認したのは瞳の色だ。今は日本人らしい黒瞳になっている。

霊障眼のステージ進行とは、無縁にも思えるような様子だ。

「こんにちは先輩、じゃなかった主任、とリアナさん。コーヒー買ってきたんですけどですか？」

呑気な笑顔で買い物袋を見せる彼も病院着だ。

「新人君。君、ドクターに何か言われなかった？」

恐る恐るそう聞くと、章は苦い表情。

「いやあ検査ばかりでしたよ。なんかもう疲れましたね、病院つてこんな疲れる所でしたっけ？ それにしてもさっき、先輩、じゃなかった主任とよく似た人と」

「今は仕事じゃないんだから、普通でいいわよ」

「よく似た人とすれ違ったんですが、どうも……凄いですね」

章は難しい顔をして顎に手を添えた。

彼女の眼光が鋭くなる。もしかベランジェールの持つ膨大な術式回路に気付いたのか。もしくは自分の体を治した際に使った術式の廃棄粒子を感じたのか。

だとしたら優れた術式使いとしての嗅覚を持っている事になる。この少年の才覚はもはや揺ぎ無いものだろう。

「あの大盛り、いや特盛り感……アンディさんと互角ですかね」

しばらくは沈黙だった。だがその意味するところに気付いた彼女は、ベッドの脇に降り立った。

章は空気が凍った事に気付かない。

「何の話かしら？」

リアナが鍵を閉めたのに、どうして閉めるんですか、と質問するが答える者はいない。

「なんの　はなしかしら？」

右を握ったり開いたりして、具合を確かめている。

「いや、ちよつと口が滑っただけです。ほら僕冗談とか好きでよく言ってるっていうか勘弁してくれませんかどうか」

失言に気付いて弁解をしても、もう遅かった。

「ええよく解ったわ、真面目そうな顔して実はそんな事考えてたのね、ふーん。」

ああ言い訳はいいの、別に聞きたくないし。別に君を心配してたって事もないから。

ステージ進行とか何とか、本当に何も、ねえ。

でもそうね、あえて一つ言わせてもらうとするならば「

踏み込む。腰の入ったキレの良いボディブローが、彼の鳩尾に吸い込まれていく。

「死ねえ——！」

リアナは一人、扉の前で耳を塞いでいた。部屋の中に響いた悲鳴が廊下に漏れていないか、それだけが気掛かりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944r/>

驟雨（改訂版）

2011年10月9日22時15分発行